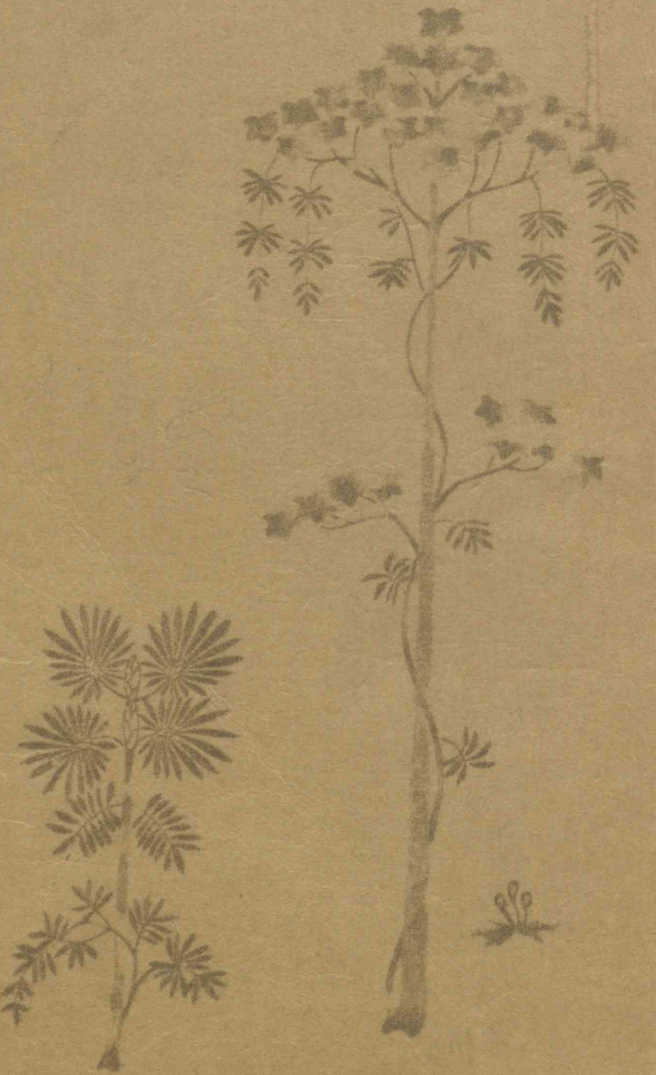
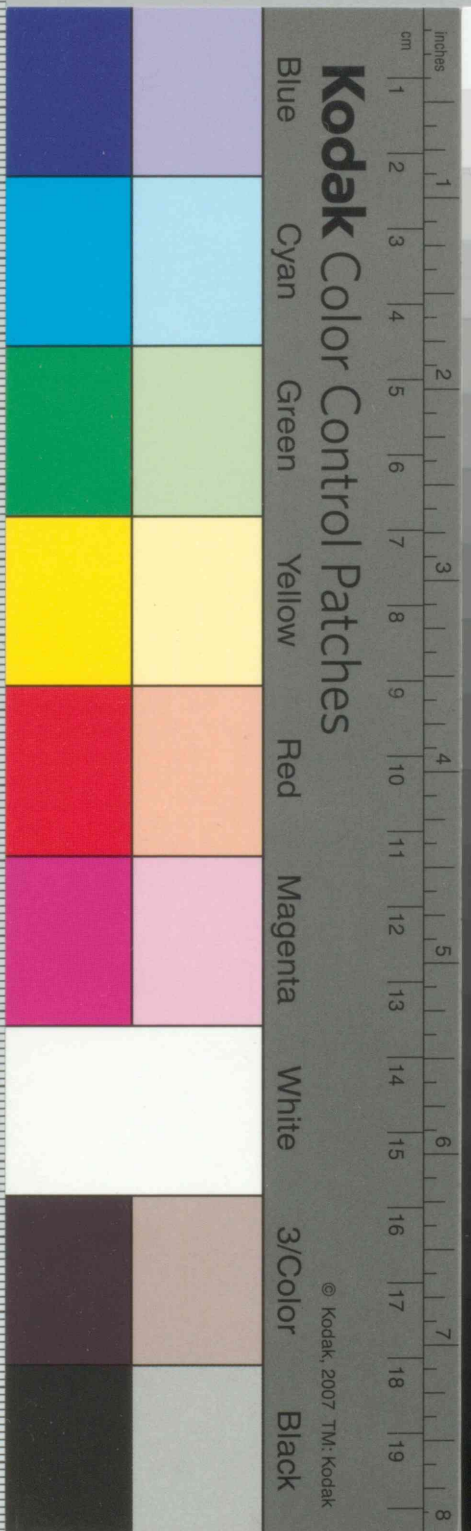


訂五
新

日本
詰
本



375.9
Y019
資料室



Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

41438

教科書文庫

4
810
41-1934
20000
50953



資料室

375.9
Y019

昭和九年十一月二十六日
中學校國語漢文科・實業學校國語科用

文部省檢定濟

訂五

新日本讀本

修文館發行





(第三課參照)

(社神日春・良奈) 光寂の然自

Handwritten Japanese text in cursive style, including the characters '藤', '日', '春', '齋', '本' and '謝文翁身所'.

編纂趣意要項

國語教育の目的はまづ國語を正しく且つ完全に把握せしめ、次いで國語によつて表現された國民精神と國民文化とを徹底的に理解せしめるにあると信じます。

この目的を達成する爲に

- 一 現代の生命のさながらに動いてゐる現代文の精神を確實に味得せしめたい。
- 二 現代まで流れて來た源泉に棹さして前代文の精神を完全に理解せしめたい。
- 三 かくて國民精神を反射してゐる國語の運用に徹底せしめ、

三 世界の面前に於てそれを磨きあげる基礎を造りたい。以上三旗幟を目標となし、古今の代表作家の名篇について採訪厳選し、それを適宜に鹽梅排列しました。『前介文』の編輯も、かくて國語愛から國家愛への道程を残す所なく、柔しつゝ、中等學校に於ける國語教育の完成に貢献したいと祈つて止まないのであります。

昭和九年七月

編者 識

卷六 目次

一	光明を尙ぶ精神	清原貞雄	一
二	日輪頌	正富汪洋	八
三	秋窓雜記	北村透谷	二
四	空ゆく雁	(會我物語)	四
五	手巾	芥川龍之介	三
六	雅文抄		
	一 書讀むことのたとへ	(玉勝間)	三
	二 學問	(花月草紙)	三

三	漁村	(樞園文集)	三
七	青柳の絲	(諸家)	四
八	故郷の花	(源平盛衰記)	四
九	郷土の魅力	相馬御風	四
一〇	爲朝の剛勇	(保元物語)	五
一一	夜叉王	岡本綺堂	三
一二	文學と氣品	芳賀矢一	五
一三	徒然草抄	吉田兼好	
一	神無月の頃		六
二	仁和寺にある法師		六
三	是も仁和寺の法師		六

四	弓射る事を習ふに		六
五	高名の木登り		六
六	相模守時頼の母		六
一四	心の窓	柳田國男	七
一五	敬天愛人	西郷南洲	七
一六	西郷隆盛に與ふ	山縣有朋	七
一七	知己の難	徳富蘇峰	一〇三
一八	冬の風物	佐佐木信綱	一〇七
一九	おらが春	小林一茶	
二〇	おらが春		二四
二一	おらが春		二六
二二	おらが春		二六

二〇	春の樂しみ	貝原益軒	二八
二一	土	長塚節	三五
二二	民	島木赤彦	三三
二三	千曲川旅情の歌	島崎藤村	一四〇
二四	自然美の心象	吉江喬松	一四四
二五	大樹禮讚	鶴見祐輔	一四九
二六	大和民族發展の跡	稻畑勝太郎	一五五
二七	明治維新の精神	中村孝也	一六二

目次 終

訂五 新日本讀本 卷六

一 光明を尙ぶ精神

清原 貞雄

公的に生活して、私的個人生活を理想としない日本國民は、自然の結果として、光明を尙ぶ精神をもつてゐる。我が國民は古來赤き心を尙ぶ國民である。公明正大ですこしの暗い所もない朗かな心が「赤き心」である。「赤き心」は「明き心」であつて、丹心、赤心、清明心などの文字が當てられ、「あかくき心」なども言はれてゐる。このあかき心を尙び、あかき心をもつ事が日本國民の誇である。素盞鳴尊が高天原で天照大神の爲にその心事を疑はれた時に、誓約によつてその心のあかい事が證明されたと

清原貞雄
大分縣の人、明治十八年生、史學家、廣島文理科大學教授、私的個人生活

誓約

是非曲直を判斷する時、神に誓を立てて、その誓の通りの驗の表れるか否かによつて神意を判する神事

言つて、大いに得意の様を現された神話がある。日本國民の信仰上の最大最高の目標は、言ふまでもなく天照大神である。天照大神は日本國民の大祖としてこれを奉戴するのであるが、同時に太陽神として崇敬されてゐる。太陽は光明の本源である。國民信仰上に於ける最大最高の神を、光明の本源である所の太陽と結び附けてゐる所に、我が國民の光明を尙ぶ精神が十分に現れてゐると思ふ。我が國民が古來白色を尙んで來た事、殊に神道に於てそれが著しい事も、白の色がもつ所の明るさを尙ぶのである。勿論神道に於ては、清淨を尙び、その無垢無染といふ清らかさを尙ぶ所から來てゐるのでもあるが、明るさといふ事もある。否、清らかさと明るさとは元々共通のものである。國民思想、國民信仰の投影とも言ふべき神話その物が、既に光明を尙ぶ精神的特色を表現してゐる。明るく朗

神道

北歐神話

古代のスカンディナヴィヤ(今のスウェーデン、ノールウェー、デンマーク、アイスランド等を含む)に住んだ民族に傳はつた神話。

印度の神話

印度に移住したアーリヤ民族の間に發達した神話。

黄泉國

夜見國と同じ、暗黒の世界で死の國を指す。

さばへ、あやむい

天の安の河
彌瀨の河、即ち幾瀨もある廣い河。

かな氣分。——これが我が國の神話のもつ最も著しい特色であつて、他國の多くの神話に見るやうな陰慘な氣分は少しも現れてゐない。例へば、北歐神話にしても、印度の神話にしても、陰慘な物語が可なり多く含まれてゐるのであるが、我が日本の神話にはかやうな物語は殆どない。我が國には光明と歡喜とに満ちた高天原の神話はあるが、かの佛教などといふ暗黒陰慘な地獄に相當するものは認められない。死者の行くべき世界として黄泉國の物語はあるが、決して地獄物語に對比すべきものではない。光明の神天照大神が天岩戸に隠れまして、天の下が常闇になつた時には、さばへなす荒ぶる神々が所を得顔に荒びて、國民は大いに困つたのであるが、國民はかくの如き際に於ても、決して屈託したり悲觀したり、失望落膽したりする事はなく、八百萬の神々は直ちに天の安の

常世の長鳴鳥
常世は常夜(常闇に同じ)長鳴鳥は雞のこと。
天鈿女命
猿女(さるめ)君の祖天孫降臨の時御供をした五部神の一。

御民われの歌
萬葉集卷六、海犬養宿禰岡麿の作。

しるしありんかありあふ

河原かはらに集つて、盛んに火を燎たきやし、黎明を象徴する所の常世とよよの長鳴鳥ながなきどりを鳴かしめ、天鈿女命あめのつづめのみことをして滑稽な舞踊をなさしめ、八百萬の神々の笑ふ聲が高天原を揺り動かしたとある。勿論これは神話物語であるが、かやうな神話物語は、光明を尙ぶ國民の精神から生まれたものである。

かるが故に、國民は樂天的である。常に物を明るく見る。世をはかなむ思想は元來ない。物は見方に依つて明るくも暗くも見える。すべての物を明るく見るのが日本國民の特性である。悪人はすべての事がらを悪意に解し、善人はすべての事がらを善意に解釋する。自ら明るい心持をもつてゐる者は、すべての事がらを明るく見るのである。

御民われ生けるしるしあり天地の
さかゆる時にあへらく思へば

あへらくあうたことよ

頽廢的

清少納言

平安時代の文學者、清原元輔の女、第十六代一條天皇の中宮定子に仕へた。

ひことそがひよん中

この歌こそ、日本國民の物の見方を代表したものである。勿論一種の厭世思想の發生した事も否定することは出来ない。しかし、それは多くは佛教の厭世的な思想の影響である。平安時代の貴族が頽廢的な暗い思想に陥つてゐた事は、當時の物語類を見れば直ちに看取される。しかし、同時代の清少納言はその隨筆枕草子に、ころは正月、三月、四月、五月、七月、八月、九月、十月、十二月、すべてをりにつけつゝ、ひとゝせながらをかし。」と言つて、日本人特有の明るい見方をしてゐる。これが本來の日本精神なのである。

今一つ日本國民の光明を尙ぶ精神を現してゐるのは家屋である。殊に我が固有建築の典型であるとせられてゐる神社建築に於てそれが著しい。概して宗教に關する建築物には陰鬱な物が多い。基督教會の如きは宗教的建物としては明るい方

典型

根本中堂
比叡山の東塔の本堂
當山最初の建立、國
寶建造物である。

であるが普通の我が國の家屋に比較すると、餘程陰鬱に出來てゐる。佛教の寺院建築にいたつては一層それが甚しい。就中、天台宗眞言宗などはその極端な例である。天台宗の總本山延曆寺の根本中堂に參詣した人は何人も知つてゐる事であるが、案内者は日中でも蠟燭を點して案内する。それ程暗く出來てゐるのである。佛教で極樂淨土の事を一に寂光土と言ふ。寂光土は後世發達した佛教では色々むづかしい理窟を附けてゐるが、本來の意味は、幽な光の國といふ事である。光明よりも寧ろ薄暗いのを理想とする考へ方から、極樂淨土を寂光土と言つたので、天台宗や眞言宗などで佛を安置する本堂を薄暗くする所以もこゝにある。

然るに神社の建築は四方明け放してある。これは佛教建築と極めて顯著な對照をなしてゐる。國民が樂天的の氣分に富

照應
哲學

んで居り、物事を悲觀的に考へる事をしないといふ事と、この光明を尙ぶ精神とは、相照應するのである。或は樂天的であり、餘り氣分の明る過ぎる日本には、深淵な哲學は生まれ難いと言ふ者がある。これは多少理由のある言分である。

しかし、佛教の陰鬱で厭世的な思想の、遂に印度を亡してしまつた事を考へる時、吾人は日本國民が光明を尙ぶ精神をもつてゐる事を、遺憾に思つたり、卑下したりする必要は更にないと思ふ。光明を尙び、物に屈託せず、若々しさを永久に失はず、常に朗かな心持を有し、萬難を排して進んで行く勇氣を失はない間は、我が帝國の前途は洋々たるものであつて、國を護るこの精神こそ、國の寶であると言はなければならぬ。

(日本國民の精神)

頌
……ほめたる……

二日 輪 頌

正 富 汪 洋

理想
日最高の考へ

わが國を表象するは
世界を遍く照らす
燦然たる太陽
わが國民の理想は
高照りわたる
唯一無比の太陽
國の名は日本
男子の稱は日子

徳澤
……めいみ

女子の稱は日女
日の丸の國旗は
そもく世界に
何を意味する。
國民よ、みな
日の威徳と日の公明と
日の徳澤と日の愛情とを保て。
日は利己的でない。
日本は利己的でない。
そこに大同化の偉力がある。

日は輝いて萬物を輝かす、
 日本の國民は輝いて
 普く他を輝かす。
 我等は他動的、
 我等の使命は
 世界の幸福増進。
 我はいふ、我等の祖先の
 常に懷いた大理想を
 掲げよ、行へよ、太陽の子と。

三 秋 窓 雜 記

北 村 透 谷

悲しきは秋なれど、また心地よきも秋なるべし。春は俗を狂
 せしむるに宜しけれど、秋の士を高うするに如かず。花の人を
 酔はしむると月の人を清ましむるとは、自ら味はひを異にする
 ものあり。喜樂の中に人間の五情を沒了するは世俗の免るる
 能はざるところながら、我は、萬木凋落の期に當り靜かに物象を
 察するの快なるを選ぶなり。
 希望は人を欺き易きものぞ。今年の盛夏鎌倉に遊びて、居る
 こと僅に二日、思へらく、この秋こそはこゝに來りてよるづの秋
 の悲しさを味はひ得んと。圖らざりき、身事、匆忙として、空しく
 中秋の好時節を紅塵萬丈の裡に過さんとは。然れども、秋は鎌
 倉に限るにあらず、人間到るところに詩界の秋あり。欺き易き

北村透谷
 名は門太郎、神奈川
 縣の人、小説家、評
 論家、明治二十七年
 歿、年二十七。

俗

五情、喜、怒、哀、楽、欲

欺き易きものぞ

思へらく

思へらく

思へらく

紅塵萬丈、都倉

鴉カラス 御すカラス こそあれ



物色モノイロ まいこ...あるをや

希望を駕御するの道は斯にこそあれ。我が庵もまた秋の光景には洩れざりけり。咽鳴きやぶるばかりの鴉の聲々高き梢に聞ゆるに窓開きてそこかこゝかと打見ればそこにもあらずこゝにもあらず。窓を閉ぢて書を披けば一層高く聞ゆるなり。鳥の聲ぞと聞けば鳥の聲なれど、秋の聲ぞと聞けばその面白さ讀書の類にあらず。病みて他郷にある人の身の上を氣遣ふは、人も我も變らじ。されど、我は常に健全なる人のたまゝ床に臥すを祝せんとはするなり。病なき人の道に入ることの難きは、富める人の道に入りがたきに等しからん。世には體健かなるがために心健かならざるもの多ければ、常に健かなるもの十日二十日病床に臥すは、さまで恨むべきことにあらず。對してこの秋の物色に對して、命運を學ぶにこよなきたよりあるをや。かく我は眞意

微恙オホシの病ヤミを以て

漠漠ハクハク摸モ

矮小チビ

物思モノオモのすまじく南の玉ミナモトの如く
人の心をなぐさむる秋の風情
の思ふべきはこれなり

欣樂キョウラク 文法

すしむスシム なりナリ けりケリ けりケリ

を以て微恙ある友に書き遣れり。萩薄我が庭に生ふれど、我は在來の詩人の如く、此等の草花を珍重すること能はず。我は、荒漠たる原野に名も知れぬ自然の花を愛づるの心あれども、園藝の些技にてつくりたる矮小なる自然の美をさほどに嬉しと思ふ情なし。さはいへど、敢て在來の詩人を責むるにはあらず、又自己の愛するところをいはんにもあらず、たゞ我が秋に對する感じの一として記するのみ。夜更けて枕の未だ安まらぬとき蟋蟀の聲を聞くは、眞の秋の情なりけり。その聲を聞く時に希望もなく、失望もなく、恐怖もなく、欣樂もなし。世の心全く失せて秋のみ胸に充つるなり。松蟲・鈴蟲のみ秋を語るにあらず、古事・古文のみ物の理を教ふるにあらず。一蟋蟀のためにも我は眠の惜しまれて、物思ひなき心に思ひを宿しけり。

(透谷全集)

いざさ給へり山内にて下

雁

養和元年
紀元一八四一年

一萬・箱王

工藤家次
祈家・祈親
祈繼・祈經

母
祈泰
祈成(二萬)
時致(箱王)

名は満江、祈泰の死
後祈信に再嫁した。

曾我殿
曾我太郎祈信

曾我殿こそ...あれ

方ぞ...なかりける

工藤一藤
工藤祈經

四空ゆく雁

頃は人皇第八十一代安徳天皇の養和元年新玉の年立返り、一萬は九つ箱王は七つにぞなりにける。或夕暮箱王は母の膝の上にはたはぶれながら、いかに母御前、父はいづくにおはしますぞや。その佛はいづくにましますぞや。往きて拜みたてまつらばや。母御前、いざさせ給へ。」といひければ、遙かに忘れたる來しかたも、今更思ひいだされて、消え入るばかりに思はれて、母泣く泣くのたまひけるは、あの曾我殿こそおのれらが父にてあれ」と、心強くかたらひけれども、涙に咽びて陳じやる方ぞなかりける。

箱王重ねて申しけるは、父御前は、まことやらむ、狩場より歸り給ふ道にて、工藤一藤とやらむに射られ、死に給ひぬ。」と、兄御前

語りもの

権勢の臣

此の里

相模國(神奈川縣)足柄下郡曾我中村



おとなしく
関く

甲... 甲たうらば

は語らせ給ふぞや。當時鎌倉殿のきりものには、鎌倉より伊豆



曾我兄弟飛雁を見

へ、箱王殿、空を飛ぶつばさも、皆別のつばさぞまじへざりける。

あつち
にてぞ……らむ

人倫

和殿

河津殿

河津三郎祐泰

ありき

ありきなむ

今ぞ……今頃は

射あさむ

射あさむ事であらう

あさむ事

あさむ事

あさむ事

あさむ事

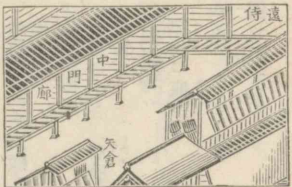
あさむ事

あさむ事

五つ連れたる鳥の中、一つは父、一つは母、三つは子どもにてぞあるらむ。物いはぬ鳥類すらかくの如し。われらは人倫に生まれながら、和殿は弟、我は兄、母はまことの母なれども、曾我殿は實の父にてましまさぬことこそ悲しけれ。われらが父をば河津殿と申してありきとかや。父だにも世におはしまさば、馬鞍をも賜はり、弓矢をも持ちて、今ぞ思ふやうに物を射ありきなむ。われらより幼きものにて、馬鞍、弓矢をもて物を射ありくこと、の羨ましさよ。これらの事ども思ひつゞくれば、いつより今宵は父御前の戀しくおはしますぞや。」とて、袖に顔を差入れてさめざめと泣きければ、弟もこざかしく顔をあはせて泣きゐたり。一萬の乳母の女房、これを聞きて、「あなあさまし、人もこそ聞け。いかに和上、藤達夜も更けぬるに、左様にておはするぞ。とくとく入らせ給へ。」と、怖ろしげにいひければ、二人の者は門外へ逃

いふか……早く
十五だも

遠侍十五いりも



一の能

領掌 承知した

と年ゆへに身ゆ

げ出でて、思ふやうに飽くまで泣きて後に入りけり。或時、兄弟は竹の小弓に薄矧やの小矢を取添へて、遠侍に出でてあそびけるが、明障子のありけるに二人立ち向ひ、あなたこなたへ射とほして、一萬箱玉に申しけるは、「われらもいつか成長し、和殿は十三、われは十五だにもなるならば、いかならむ野山にてもあれ、親の敵祐經をかくの如くさし合ひて射取りて、とにもかくにもなりなむ。和殿も弓よく射習ひ給へ、われも射習はむ。弓矢は男の一の能にあるなるぞ。」といひければ、弟もうちうなづきて領掌しけり。年ばへには怖ろしきことかなと人々思ひけり。一萬が乳母、このよしを聞き知りて、大きに驚きて母にかくと申しければ、母も大きに仰天し、二人の子供を呼びよせ、泣く泣く語られけるは、「まことか、おのれらがさも怖しき謀叛をおこさむ

伊東入道
 名は祐親
 千鶴御前
 母は祐親の女
 松河が淵
 伊豆國(靜岡縣)田方
 郡伊東町にある
 石橋山の合戦
 治承四年(一一三〇)八月
 石橋山
 相模國(神奈川縣)足
 柄下郡
 土肥の杉山
 土肥の山谷、石橋山
 の南
 梶原景時
 頼朝の寵臣
 ゆゑにこそ……
 保ちたるぞ
 稀有の命

と議しあふなるは。もし人の耳に入りなばよかるべきか。おのれらが祖父伊東入道殿は、當鎌倉殿の若君千鶴御前を松河が淵に沈め奉りし故に、御敵となつて、先年伊東の館において失はれ給ひぬ。おのれらかゝる謀叛人の孫なれば、敵左衛門尉、上の御敵に申しなして失はるべし。その時、千たび百たび悲しむともかなふべきか。そのうへ汝等が鎌倉殿へ召されし時も、曾我殿なげき申してとゞまりたり。そのゆゑは、鎌倉殿石橋山の合戦に打負けて、土肥の杉山へ入らせ給ひし時、梶原景時と曾我殿と二人心をあはせて助け奉りし故に、駿河國八郡の大名になされしその御恩を皆返しまゐらせて、『二人の幼きものどもを助けて給はらむ。』と申されければ、鎌倉殿憐ませ給ひて、『それほどの志ならば、二人の子供祐信に預くるぞ。』と、仰せられけるゆゑにこそ、汝等も安穩にて今まで稀有の命を保ちたるぞ。それ

生々世々

誠められければ

につきても、曾我殿の芳恩をば生々世々にも報じ盡くすべきか。鳥類畜類にても恩を知るところ、聞け、況や汝等人倫に於てをや。しかるを、却つて曾我殿に歎を與へむこと、かへすくも口惜しかるべし。その恩を報ぜんと思はば、速に謀叛をとゞむべし。』と、口説きたてて誠められければ、二人の子供目と目とを見合はせ、顔打赤めて立ちにけり。それより後は、人の聞かぬ所にては内々談議しけれども、人目に顯れては語り合ふ事もなし。母も内々怖しき者ども、心ざまかなと思はれければ、弟の箱王をば出家にせむとぞ思はれる。

(曾我物語)

曾我物語
 十二卷、著者不明、
 曾我兄弟の復讐の顛
 末を記した物語。

手巾

五手巾

芥川龍之介

芥川龍之介
東京市の人、明治二十五年生、小説家、昭和二年歿、年三十六

ストリンドベルク

スウェーデンの大戯曲家、西暦一九三三年歿、年六十三

警拔

岐阜提燈



一瞥

巧緻なる美術工藝品は、少からず奥さんの氣に入つてゐる。随つて、岐阜提燈をヴェランダにぶら下げたのも、先生の

東京帝國法科大學教授長谷川謹造先生は、ヴェランダの籐椅子に腰をかけて、ストリンドベルクの作劇術を讀んでゐた。先生は警拔な一章を讀み了るごとに、黄いろい布表紙の本を膝の上へ置いて、ヴェランダに吊してある、岐阜提燈の方を、漫然と一瞥する。不思議な事に、さうするや否や、先生の思量はストリンドベルクを離れてしまふ。その代り、一緒にその岐阜提燈を買ひに行つた奥さんの事が心に浮かんで來る。先生は、留學中、米國で結婚をした。だから奥さんは、勿論、アメリカ人である。が、日本と日本人とを愛する事は、先生と少しも變りがない。殊に、日本の、巧緻なる美術工藝品は、少からず奥さんの氣に入つてゐる。随つて、岐阜提燈をヴェランダにぶら下げたのも、先生の

白紙をまはして

講義

目せらるるもの

(見せらるるもの)

歸趨する所

編狭者

好みと言ふよりは、寧ろ奥さんの日本趣味が、一端を現したものと見て、然るべきであらう。先生は、本を下に置く度に、奥さんと岐阜提燈と、さうしてその提燈によつて代表される日本の文明とを思つた。先生の信ずる所によると、日本の文明は、最近五十年間に物質的方面では、可成顯著な進歩を示してゐる。が、精神的には、殆ど、これといふ程の進歩も認める事が出來ない。否、寧ろ、或意味では、墮落してゐる。では、現代に於ける思想家の急務として、この墮落を救済する途を講ずるのには、どうしたらいいのであらうか。先生は、これを日本固有の武士道による外はなと論斷した。武士道なるものは、決して褊狭なる島國民の道徳を以て、目せらるべきものでない。却つてその中には、歐米各國の基督教的精神と一致すべきものさへある。この武士道によつて、現代日本の思潮に歸趨を知らしめる事が出來るならば、

思潮

巾

それは、獨り日本の精神的文明に、貢獻する所があるばかりではない。延いては、歐米各國人と日本國民との相互の理解を容易にするといふ利益がある。或は國際間の平和も、これから、促進



芥川龍之介

されるといふことがあ
るであらう。先生は、
日頃からこの意味に於
て、東西兩洋の間に横た
はる橋梁にならうと思
つてゐる。かういふ先
生にとつて、奥さんと岐
阜提燈と、その提燈によつて代表された日本の文明とが、或調和
を保つて、意識に上るのは決して不快な事ではない。
所が、何度かこんな満足を繰返してゐるうちに、先生は追々、讀

丹念に 熱心

芥川龍之介

人生は落丁の多い本に似てゐる。一部を成してゐるとは稱し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。

清 興 興 興 興 興 興
(俗に離れ極)

今一
方
ツラ
ツラ

んでゐる中でも、思量がストリンドベルクとは縁の遠くなるのに氣がついた。そこで、ちよいと、思々しさに頭を振つて、それから又丹念に、眼を細い活字の上に曝しはじめた。

しかし、先生は、その熱心な書見を中途でやめなければならなかつた。何故といへば、突然、訪客を告げる小間使が、先生の清興を妨げてしまつたからである。

先生は本を措いて、今し方小間使が持つて來た小さな名刺を一瞥した。名刺には小さく西山篤子と書いてある。どうも、今まで會つた事のある人ではないらしい。交際の廣い先生は、籐

人生は落丁の多い本に似てゐる。一部を成してゐるとは稱し難い。しかし兎に角一部を成してゐる。

芥川龍之介

恰好
判別
おんりの
新断

鐵御納戸
紹
翡翠
鬚

椅子を離れながら、それでも念の爲に、一通り、頭の中の人名簿を繰つて見た。が、やはり、それらしい顔も、記憶も浮かんで来ない。そこで、棗代りに、名刺を本の間へはさんで、それを籐椅子の上に置くと、落著かない様子で、銘仙の單衣の前を直しながら、ちよいと又、鼻の先の岐阜提燈へ眼をやつた。誰もさうであらうが、待たせてある客より、待たせて置く主人の方が、かういふ場合は多く待ち遠しい。

やがて、時刻をはかつて、先生は、應接室の扉を開けた。中へ入ると、椅子に掛けて居た四十、恰好の婦人の起ち上つたのが、殆ど同時である。客は、先生の判別を超越した、上品な鐵御納戸の單衣を着て、それを黒の紹の羽織が、胸だけ細く餘した處に、帶止の翡翠を、涼しい菱の形に浮き上らせてゐる。髪が、丸鬚に結つてある事は、かういふ些事に無頓著な先生にもすぐわかつた。

日本人に特有な、丸顔の、琥珀色の皮膚をした、賢母らしい婦人である。先生は一見して、この客の顔を、どこかで見たことがあるやうに思つた。

「私が長谷川です。」

先生は、愛想よく、會釋した。かういへば、會つた事があるのなから向うでいひ出すだらうと思つたからである。

「私は西山憲一郎の母で御座います。」

婦人は、はつきりした聲で、かう名乗つて、それから、丁寧に、會釋した。

西山憲一郎といへば、先生は覚えてゐる。よく思想問題を提げては、先生の許に出入した。それが、此の春、腹膜炎に罹つて、大學病院へ入院したので、先生も序ながら、二度見舞に行つてやつた事がある。此の婦人の顔を、どこかで見た事があるやうに

瓜二つ

思つたのも偶然ではない。あの眉の濃い、元氣のいゝ青年と、此の婦人とは、日本の俗諺が、瓜二つと形容する様に、驚く程よく似てゐるのである。

「はあ、西山君の……さうですか。」

先生は獨り、頷きながら、小さなテーブルの向うにある椅子を指した。

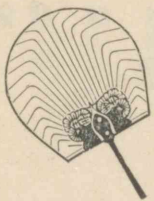
「どうか、あれへ。」

婦人は、一應、突然の訪問を謝してから、又、丁寧に禮をして、示された椅子に腰をかけた。その拍子に、袂から白いものを出したのは、手巾であらう。先生は、それを見ると、早速テーブルの朝鮮團扇を、勧めながら、その向側の椅子に、座を占めた。

「結構なおすまひでございます。」

婦人は、稍、わざとらしく、室の中を見廻した。

朝鮮團扇



挨拶

「いや、廣いばかりで一向かまひません。」

斯ういふ、挨拶に慣れた先生は、折から小間使の持つて來た冷茶を、客の前に直させながら、直ちに話題を相手の方へ、轉換した。

「西山君は如何です。別段御容體に變りはありませんか。」

「はう。」

婦人は、つましく、両手を膝の上に重ねながら、ちよいと語を切つて、それから、靜かにかう言つた。やはり、落著いた、滑らかな調子で言つたのである。

「實は、今日も、悴の事で上つたのでございますが、あれも到頭いけませんでございました。在學中は、色々先生に御、厄介になりました……。」

婦人が手に取らないのを、遠慮だと解釋した先生は、この時丁度、紅茶、茶碗を口へ持つて行かうとしてゐた。なまじひに、くど

五手巾

嘜 髭

響

く、勧めるよりは、自分で嘜つて見せる方がいゝと思つたからである。所が、まだ茶碗が柔らかな。口髭に届かない中に、婦人の語は、突然先生の耳をおびやかした。茶を飲んだものだらうか、飲まないものだらうか。——かういふ思案が、青年の死とは、全く獨立して、一瞬の間、先生の心を煩はした。が、何時までも、持ち上げた茶碗を、片づけずに置く譯には行かない。そこで先生は思ひ切つて、がぶりと半碗の茶を飲むと、心持ち眉を擧めながら、むせるやうな聲で、「そりやあ。」と言つた。

「病院に居りました間も、よくあれがお噂を致したものでございますから、お忙しからうとは存じましたが、お知らせかたくお禮を申し上げます。」

「いや、どうしまして。」

先生は、茶碗を下へ置いて、その代りに青い蠟を引いた團扇を取

無然、びく／＼と、去、存子

上げながら、無然として、かう言つた。

「到頭、いけませんでしたかなあ、丁度これからといふ年だつたのですが。……私は又、病院の方へも御無沙汰してゐたものですから、もう大抵、よくなりました事だとばかり、思つてゐました。」

すると、何日になりますかな、なくなられたのは。」

「昨日が丁度初七日でございます。」

「やはり病院の方で……。」

「さやうでございます。」

「いや、實際、意外でした。」

「何しろ、手の盡くせるだけは、盡くした上なのでございますから、あきらめるより外は、ございませんが、それでも、あれまでに致して見ますと、何かにつけて、愚痴が出ていけませんのでございます。」

舉措 舉動

日常茶飯事 普通

ウイルヘルム第一世
プロシヤ王及びドイツ皇帝、西暦一八六二年九月十一日歿
珈琲 感銘 味の感

こんな對話をしてゐる間に、先生は、意外な事實に氣がついた。それは、此の婦人の態度なり、舉措なりが、少しも自分の息子の死を語つてゐるらしくないと言ふ事である。眼には、涙もたまつてゐない。聲も、平生の通りである。その上、口角には、微笑さへ浮かんでゐる。これで、話を聞かずに、外貌だけ見てゐるとしたら、誰でも、此の婦人は、日常茶飯事を語つてゐるとしか、思はなかつたに相違ない。先生には、これが不思議であつた。

昔、先生が、ベルリンに留學してゐた時分の事である。ウイルヘルム第一世が、崩御された。先生は、此の訃音を行きつけの珈琲店で耳にしたが、固より一通りの感銘しか受けなかつた。そこで、何時もの様に、元氣のいゝ顔をして、杖を脇に、挟み乍ら、下宿へ歸つて來ると、下宿の子供が二人、扉を開けるや否や、兩方から先生の頸に抱きついて、一度にわつと泣き出した。一人は、茶色

子煩悩 子煩悩

元首 皇帝

衝動的 豫期 告白 表

怪訝 不思議

のジャケットを著た、十二になる女の子で、一人は紺の短いズボン
を穿いた、九つになる男の子である。子煩悩な先生は、わけがわから
ならないので、二人の明るい色をした髪を撫でながら、頻りに、「どうした〜。」と言つて、慰めたが、子供は中々泣きやまな
さうして、しやくり上げながら、こんな事を言ふ。

「おぢいさまの陛下がおなくなりなすつたのですつて。」
先生は、一國の元首の死が、子供にまで、これ程悲しまれるのを
不思議に思つた。獨り皇室と人民との關係といふやうな問題
を考へさせられたばかりではない。西洋へ來て、以來何度も先
生の視聽を動かした、西洋人の衝動的な感情の告白が、今更のや
うに、日本人たり、武士道の信者たる先生を、驚かしたのである。
其の時の怪訝と同情とを一緒にしたやうな心持は、いまだに忘
れようとしても、忘れる事が出來ない。先生は、今も丁度、其の

位の程度で、逆に、この婦人の泣かないのを不思議に思つてゐるのである。

が、第一の發見の後には、間もなく、第二の發見があつた。

丁度、主客の話題がなくなつた青年の追懐から、その日常生活の細目に及んで、更に又、もとの追懐へ戻らうとしてゐた時である。何かの拍子で、朝鮮團扇が、先生の手を、こつて、ぱたりと寄木の床の上に落ちた。會話は無論、寸刻の中斷を許さない程、切迫してゐるわけではない。そこで、先生は、半身を椅子から前へ、り出しながら、下を向いて、床の方へ手を伸した。團扇は、小さなテーブルの下に――上、草履に隠れた婦人の白足袋の側に落ちてゐる。その時、先生の眼には、偶然、婦人の膝が見えた。膝の上には、手巾を持つた手のつてゐる。勿論、これだけでは、發見でも何でもない。が、同時に、先生は、婦人の手は、はげしくふるへて

敬虔

誇張

敬虔

誇張

ゐるのに氣が付いた。ふるへながら、それが感情の激動を強ひて抑へようとするせゐるか、膝の上の手巾を、兩手で裂かないばかりに堅く握つてゐるのに氣が付いた。さうして、最後に、皺くちやになつた絹の手巾が、しなやかな指の間で、さながら微風にも吹かれてゐるやうに、繡ぬいどのある縁を動かしてゐるのに氣が付いた。婦人は、顔でこそ笑つたゐるが、實は、さつきから全身で泣いてゐたのである。

團扇を拾つて、顔をあげた時に、先生の顔には、今までにない表情があつた。見てはならないものを見たと言ふ、敬虔な心持と、さういふ心持の意識から來る、或満足とが、多少の芝居氣で、誇張ツヤシヤリされたやうな、甚だ、複雑な表情である。

「いや、御心痛は、私のやうな子供の無いものにも、よくわかります。」

先生は、眩しいものでも見るやうに、稍、大仰に、頸を反らせながら、低い、感情の籠つた聲でかう言つた。

「有難うございます。が、今更、何と申しましても、かへらない事でございますから……。」

婦人は心持ち頭を下げた。晴々した顔には、依然として豊かな微笑が、湛へられてゐる。

それから、二時間の後である。先生は湯に入つて、晚餐を済ませて、食後の果物をつまんで、それから又、樂々とヴェランダの籐椅子に腰を下した。

長い夏の夕暮は、何時迄も薄明りを漂はせて、硝子戸を開けはなした廣いヴェランダは、まだ容易に、暮れさうなけはひも無い。先生は、其の微かな光の中で、さつきから、左の膝を右の膝の上へ

載せて、頭を籐椅子の背にもたせながら、ぼんやり岐阜提燈の赤い房を眺めて居る。先生の頭の中は、西山篤子夫人の健氣な振舞で、いまだに一杯になつてゐた。

先生は、飯を食ひながら、奥さんに其の一部始終を話して聞かせた。さうしてそれを、日本の女の武士道だと賞讃した。日本と日本人とを愛する奥さんが、此の話聞いて同情しない筈がない。先生は奥さんに熱心な聴手を見出した事を満足に思つた。奥さんとさつきの婦人と、それから岐阜提燈と——今では、此の三つが或倫理的な背景を持つて先生の意識に浮かんで來る。

抄

須賀直見
伊勢國(三重縣)の人
宣長の門人

玉勝問
十五卷、本居宣長の
隨筆。
本居宣長(號は鈴の
屋、伊勢國(三重縣)
松阪の人、國學者、
享和元年(一八一六)歿、
年七十二。

六雅文抄

一 書讀むことのたとへ

須賀直見がいひしは、廣く大きな書を讀むは、長き旅路を行くがごとし。おもしろからぬ所も多かるを經行きては、又おもしろく目さむる心地する浦山にもいたるなり。又足強き人は早く、弱きは行くこと遅きも、よく似たり。」とぞいひける。をか

かみん、
二 學 孫 康 問
玉勝問

「かの人(雪螢)集めし窓に年を積みて、ふみ見る道に心を盡く

侍るなり

さるこそ...なり
けれ

うそくはへり

さるこそ...なり

五常 仁義禮智信

五道 仁義禮智信

花月草紙

六卷、松平定信の隨筆。
松平定信(號は樂翁、磐城國(福島縣)白河城主、幕府の老中、文政十二年(一八二九)歿、年七十二。

し侍るなり。されば、世の中の事にはいとうとく侍り。」といへば「さるこそ誠の道まねぶ人なりけれ。」と、譽めものする者ありとや。

もとより道まねぶ者は、五つの常五つの道よりして、人ををさめ、己ををさむる道まねぶより外のこととはなし。されば、世の事にさとく、今のあたりのみかは千年の前つ世の事、見ぬもろこしの昔今のさまより、さかり衰ふるさざし、人の心の上より、仕ふる道のくさく、に至るまでも明らかなるこそ、道まねぶ人とは謂ふべけれ。この世の事におろそかにては、いかで道まねぶ人とは謂ふべからむ。

つれ、
三 漁

もろ二

村

今あたるのみかは、
今あたるのみかは、
今あたるのみかは、

今あたるのみかは

六雅文抄

A. 情趣深し
 B. 吹き雨の
 C. もうそつと
 D. かくて
 E. 男
 F. 男 (うせぬべう)
 G. うすべう
 H. うすべう
 I. 遊
 J. 遊
 K. 遊
 L. 遊
 M. 遊
 N. 遊
 O. 遊
 P. 遊
 Q. 遊
 R. 遊
 S. 遊
 T. 遊
 U. 遊

海人の住家ばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき
 海邊の風もたまらぬ松蔭などに、唯かりそめに造りたる藁屋ど
 ものさま、波うちよせなばやがて流れもうせぬべういとばかな
 げに見ゆるを、繪に書きすさびたるなどはなく、にをかしき
 ものから、さて住みなば何心地かせましと、思ひやるだに心細し。
 夕つ方など、年老いたるをのこの手がらみしたるが、磯邊に立
 ちて、今日はいと遅くもあるかな。などいひつゝ、沖つ方をまぼ
 りをり。うまごどもにやあらむ、眞砂の上を走りありきつゝ遊
 び居たるに、入日さしたる島蔭より、三つ二つ歸り來る舟の、舵ひ
 き折りてほこらしげなるを、老人待ち得顔にうちほゝゑみたる
 は、ざち多かりしにやと見ゆ。渚によせて飛び下るまゝに、綱繰
 り寄せなどとかくしつゝの、しるに、男も女もあまた出て來て、
 大きな籠に魚ども取入れつゝ、擔ひもて行くさまはいへど

V. やのま
 W. 覗く手もあまそつ
 A. 何つ
 B. 何つ
 C. 何つ
 D. 何つ
 E. 何つ
 F. 何つ
 G. 何つ
 H. 何つ
 I. 何つ
 J. 何つ
 K. 何つ
 L. 何つ
 M. 何つ
 N. 何つ
 O. 何つ
 P. 何つ
 Q. 何つ
 R. 何つ
 S. 何つ
 T. 何つ
 U. 何つ

賑はしげなり。つめく物もて來て、小さき魚三つ四つ乞ひ
 もて行く童などもあり。すべて人多く立込み騒ぎて、舟のあた
 りかしがましく、さし寄りて覗くべくもあらず。いと長き網の、
 渚にかけ干したるを繰りためて取入れなど、やうく静まりゆ
 けば、此方彼方火ともしたる透影さへもあらはにて、いとあはれ
 に見ゆ。
 一夜宿りて見れば、浪風の響枕をゆすりて、露まどろまれず。
 曉方隣の家々目覺して、なりはひの事どもなるべし、あやしう聞
 き知らぬ事どもをおのがじし聲高にいひかはしたるげに、海人
 のさへづり、珍らしうもをかしうも。

樞園文集
 三卷、中島廣足の隨
 筆、
 中島廣足一肥後國
 (熊本縣)の人、國學
 者、元治元年(三五四)
 歿、年七十三。

(樞園文集)

七青柳の絲

下河邊長流

つひにわが著てもかへらぬ唐錦龍田や何のふるさとの山

かすみとも雨とも空はわかぬまに玉ぬきそむる青柳の絲

僧契沖
賀茂眞淵

雲雀あがる春の朝朝けに見渡せばをちの國原かすみ棚引く

ふきわたす萩より萩にみだれつ、風風もいろなる宮城野のつゆ

本居宣長
橘干蔭

たびびとの朝行く駒のひづめより霧たちのぼる足柄の山

村田春海

心心あてに見し白雲は麓にておもはぬ空にかすみ富士の嶺

遠山遠山は入日のなごりなほ見えて野は野きりわたる秋の夕ぐれ

入日さすくろの稻むら夕かけて落穂たづぬるかし鳥の
こゑ

清水 濱 臣

富士の根を木の間くにかへり見て松の蔭ふむ浮島が

香川 景 樹

原

秋の日にひかりかゞやくすゝきの穂これのたか屋にの
ぼりて見れば

僧 良 寛

駒のつめぬらさぬほどのなみよせて月しづかなる打出
の濱

千種 有 功

加納 諸 平

雲かゝるわたのみ中にあら潮を雨とふらせて鯨うかべ
り

中島 廣 足

かきくらすしぐれのそらに白鷺の羽いろさやかに入日
さすなり

大隈 言 道

妹が背にねむる童のうつつなき手にさへめぐる風車か
な

橘 曙 覽

遣水に来てはひたれる村鴉こぼすはがひのしづく涼し
も

A. 家来
 B. もとより
 C. つくまふ
 D. 病みつかつた
 E. はしく忠度
 F. 下の家来 平清盛の弟 壽永三年(一一八四)歿 年四十
 G. ありて入道
 H. 藤原俊成 元久元年(一一八六)歿 年九十一
 I. かの五條三位俊成
 J. 今令申さるる
 K. 貴君
 L. 貴君
 M. 九州へ落ちたり
 N. 多分
 O. 今令申さるる

八故郷の花

薩摩守忠度と申すは入道の舍弟なり。淀の河尻まで下りたりけるが、郎等六騎相具して忍びて都へ歸り上る。如法夜半の事なるに、五條三位俊成卿の宿所に行きて門を敲く。内にはこれを聞きけれどもかゝる亂れの世なる上いぶせき夜半の事なれば、敲けどもく開かざりけり。あまりに強く敲きければ、や久しくありて青侍を出し、戸を開かせてこれを問ふ。「忠度と申す者、見參に申し入れたき事ありて參りたり。」と答へければ、三位大庭に下り、世に恐れて内へは入れざりけれども、門をば細目に開きて對面あり。

忠度宣ひけるは、かゝる身として御ため憚あれども、所詮一門榮花盡きて都に安堵せず、西海へ落ち下り侍り、亡びむこと疑な

P. 形見に傳り
 Q. 貴君
 R. 貴君
 S. 貴君
 T. 貴君
 U. 貴君
 V. 貴君

し、世静まりて後、定めて勅撰の沙汰候はむか、たとひ身は八重の潮路の底に沈むとも、藻鹽草書きおく末の言葉、後の世までも朽ちぬ形見に傳り侍れかしと思ひ出でて、河尻より忍び上つて侍り。これぞ年ごろ讀み集めたりし愚詠どもにて侍る。



忠度・俊成を訪ふ

にみくづとなさむこと遺恨に侍り。これを砌下に參らせ置き候。勅撰の時はかならず思召し出せよ。」とて、卷物一卷、泣く泣く鎧の引合せより取出したり。三位感涙をながし、これを請取

A. 預り御りすた。

へ故郷の花

四六

B. 多の代。 畢んぬ。

C. 歌仙の指南のためか。 この忽劇の中に御音信に預ること、恐悦

D. 少からず候。 縦ひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸

E. の窓に納めて、救撰の時は思ひ出し侍るべし。」と宣へば、忠度、今

F. は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふ事なし。」とて、馬

G. に乗り、古詩を、

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。

後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。

前途程遠

大江朝綱が渤海の使に贈った詩句。

霑 纓

鴻臚

人どもにこそ... 追従せしに 追従

り「御詠一卷預りおき候ひ畢んぬ。これ永代秀逸の御形見、未來歌仙の指南のためか。この忽劇の中に御音信に預ること、恐悦少からず候。縦ひ浮生を萬里の波に隔つとも、御形見をば一戸の窓に納めて、救撰の時は思ひ出し侍るべし。」と宣へば、忠度、今は身を波の底に沈め、骨を山野に曝すとも思ふ事なし。」とて、馬に乗り、古詩を、

前途程遠、馳思於雁山之暮雲。 後會期無、霑纓於鴻臚之曉淚。

と、打上げ、詠じつ、南を指してぞ落ち行きける。本文には、「後會期遙」と書きたるを、忠度還り見るべき旅ならず、今を限りの別れなりと思ひければ、後會期無と、詠じけるこそ哀なれ。三位も名残の惜しくして、遙かにこれを見送りても、あはれ世に在りしには、この人どもにこそ諂ひ追従せしに、變る習とて、今は門を

K. 入小たつたけのしも んたりと。

二十卷、救撰歌集、 文治三年(一一九三)九月 成る。

志賀の都

滋賀縣滋賀郡にあつた天智天皇の天津宮

ながらの山

滋賀縣滋賀郡

やさしくぞ... 文法

侍り 具す 恐る 亡ぶ 朽つ

源平盛衰記

四十八卷、著者不明、 二條天皇の應保元年 (一一二二)中より、安徳天皇の壽永四年(一一三三)まで、源平兩氏の盛衰興亡を述べた軍記物語。

隔つる事の悲しさよと、哀なるにも涙、優なるにも涙、忍の袖をぞ絞られける。

代静まりて後、千載集を撰ばれけるに、忠度のこの道を嗜み、河尻より上りたりし志を思ひ出し給ひて、「故郷の花」といふ題に、「讀人しらず」とて一首入れられたり。

さなみや志賀の都は荒れにしを

むかしながらの山ざくらかな

とよめる歌なり。名字をも顯し、あまたも入れまほしかりけれども、朝敵となれる人のわざなれば、憚り給ひて、只一首ぞ入れられける。亡魂いかに嬉しく思ひけむ、哀れにやさしくぞきこえし。

(源平盛衰記)

へ故郷の花

四七

魅力
相馬御風
名は昌治、新潟縣の人、明治十六年生、小説家。
陳腐

九郷土の魅力

相馬御風

甚だ陳腐な事のやうであるが郷土といふものの、人間の心を惹きつける作用は不思議なものである。一方に、月日は百代の過客にして、往きかふ年も亦旅人なり。船の上に生涯をうかべ、馬の口とらへて生を迎ふるものは、日々旅にして旅をすみかとする。古人も多く旅に死せるあり。予はいづれの年よりか、片雲の風にさそはれて漂泊の思やまず」といひ、或は「羈旅邊土の行脚、捨身無常の觀念、道路に死なむ。これ天の命なり。」などと、いつてゐた彼の芭蕉翁でさへ、他方に於ては、代々の賢き人々も、故郷は忘れ難きものにおもほえ侍るよし。我今は初の老も四とせ過ぎて、何事につけても昔の懐かしきまゝに、はらからのあまた齡傾きて侍るも見捨て難くて、初冬の空のうちしぐるる頃よ

羈旅

芭蕉
姓は松尾、名は宗厚、伊賀國(三重縣)の人、俳人、正風の祖、元祿七年(二三四)歿、年五十一。

伊陽
伊賀國(三重縣)

臍

蠅

一茶
姓は小林、通稱は彌太郎、信濃國(長野縣)の人、俳僧、文政十年(二四七)歿、年六十五。
柏原
長野縣上水内郡。
良寛
俗名は榮藏、越後國(新潟縣)の人、歌僧、天保二年(二四九)歿、年七十四。

り、雪を重ね霜を経て、師走の末伊陽の山中に至る。猶父母のいまそかりせばと、慈愛の昔も悲しくおもふ事のみあまたありて、ふる里や臍の緒に泣く年の暮などといつてゐる。

故郷は蠅まで人をさしにけり

故郷は西も東も茨の花

といった風に、永い間自分の故郷を呪つて旅から旅へと漂泊してゐた、あのすね者の俳諧寺の一茶ですら、晩年には、

これがまあつひのすみかか雪五尺

などと驚きながらも、その雪の深い信濃柏原の郷里に歸り住んで、そこで一生を終へた。

更にかの近世稀有の聖僧と云はれる越後の良寛和尚の如きも、二十二歳から四十三歳までの二十餘年間の雲水行脚の旅に

あきたらないで、それ以来、ずつと越後の郷里に孤獨な庵住生活を
をつゞけて、静かな往生を遂げてゐる、

故里へ行く人あらばことづてむ

けふ近江路をわれ越えにきと

草枕夜ごとに結ぶやどりにも

むすぶはおなじふるさとの夢

などといふ彼の旅中の歌を讀んでも、いかに彼が故郷を慕ふ思
の切なるものであつたかを察することが出来る。

二十三歳で妻子を振棄てて佛門に歸し、諸國修業の旅に出た

西行も、

柴の庵のしばし都へかへらじと

思はむだにもあはれなるべし

世の中を捨てて捨てえぬ心地して

A. 三之木.

西行

俗名佐藤義清、歌僧、
建久元年(二八五〇)歿、
年七十三

柴

みやこ離れぬ我が身なりけり

などと歌つて居り、且晩年には都に歸つて死んだ。

かういつた風に、昔からの代表的な漂泊の人々さへも、不思議
に彼等の生まれ且育てられた郷土に對しては、しかく切なる愛
慕の情を持つてゐた。抑この郷土の人間に對して持つてゐる
魅力は、どこから來るであらうか。

それは全く「何とはなし」である。理智的判断によるもので
もなく、功利的見地からでもなく、或は特に美的判断の然らしむ
るといふでもなく、それはたゞ「何とはなし」である。郷土の人
心を惹きつける魅力は、實にこの何とも言ひ現されないと
から發する。それは自然と人間と、過去と現在とを一つに融か
した、一種不思議な音楽的な魅力である。又私達が郷土を慕ふ
心は、全く自分にもよくわからない内心自發の情緒である。い

功利的見地
美的判断

本然的情緒

かなる力を以てしても否定しがたい本然的情緒である。この不可思議なる情緒の存在してゐる事實は、おそらく如何なる理智の人と雖も、否定することは出来ないであらう。

けれども今の時代には、追々この自分の郷土といふものを失ひかけてゐる人が多くなつてゐることも、亦明らかな事實である。愛慕すべき郷土を失ふことは、同時に心靈の故郷を失ふことである。漁夫にとつて、海は單に生計の資を得るのみの場所と考へられる時、漁夫は即ち心の故郷を失ふのである。農夫が山野・田畑を生活の爲の資を得る場所とのみ考へる時、彼等は心靈の郷土を失ふのである。

幾度も引き合ひに出す言葉であるが、私にはどうもエマソンの自然論の左の一節は忘れがたい。

「樵夫の伐る一箇の材木と、詩人の見る樹木との間に區別を生

エマソン
アメリカの哲學者・
詩人、西暦一八二二年歿、
年八十。

ずる。私が今朝見た愛すべき風景は、疑もなく二十三十ほどの農圃から成立つてゐる。誰はこの畑を所有し、彼はかの畑を所有し、又某は向うの森林地を所有してゐる。しかし、彼等の中誰一人もこの風景を所有するものはないのである。蓋し地平線の中には、あらゆる部分を全きものに統べて觀ることの出来る眼を持つた者の外には、何人も所有せぬ一つの財産がある。

即ちかくの如き人は詩人である。この財産こそ、是等三人の農圃に於て最も優れたものであるが、彼等の所有證明書は、この財産に對しては何等の權利を與へぬのである。」

このエマソンの所謂二つの心を併せ持った人々が、最も幸福な農夫であり、樵夫であり、漁夫であり得ると私は思ふ。樹を材木として伐る樵夫は、同時に樹木を全き一つの物として眺め得る詩人であるのに、何の差支があらう。海をすなどりの場所と

すると同時に、そこを心の郷土として愛することの出来る漁夫が、最も幸福な漁夫であるべきである。
郷土に定住して、さういつた幸福を見出だし得る人は、眞に郷土を有する人だともいへる。私達にはさういつた人々の生活が最も懐かしく思はれる。

自然は何といつても私達の心の故郷である。脚氣患者が郷里に歸ることによつて、何時となしに健康を恢復することが出来るやうに、私達の傷ついた魂は、心の底から自然を愛し、自然に懐かしむことによつて、その健康を取りもどす事が出来る。

自然を魂の郷土として懐かしむことの出来る幸福を、私達は永遠に失ひたくない。私達は自分にも、また自分の子供達にも、永遠に郷土の有する魅力を失はせたくない。それは私達のための揺籃であつて、また墳墓であるべきである。(對山雜記)

揺籃

卷末附圖參照

A. 秘めたる
B. 高か
C. せらみ、まて
あまのり
D. 屋ろう

白河殿 白河法皇の御所、二條通の北、富小路通へあつた。
左大臣殿 藤原頼長、關白忠通の弟。
内裏 後白河天皇の方、鎮西八郎源爲朝、爲義の八男、武將、嘉應二年(二八三)歿、三十二。
除目 物騒
念 こそ……すれ

一〇 爲朝の剛勇

白河殿にはかくとも知るしめさざりしかば、左大臣殿武者所の親久を召されて、内裏の様見て參れ。」と仰せければ、親久即ち馳せ歸り、官軍既に寄せ候。」と申しも果てぬに、先陣既に馳せ来る。その時鎮西八郎申しけるは、爲朝が千たび申しつるは、候、こゝ候。」と、忿りけれども、力及ばず。爲朝を勇ませむ爲にや、俄に除目行はれて、藏人たるべき由仰せけり。八郎、これは何といふ事ぞ。敵既に寄せ來たる、方々の手分をこそせられむずれ。只今の除目物騒なり。人々は何にもなり給へ。爲朝は今日の藏人と呼ばれても、何かせむ、唯もとの鎮西八郎にて候はむ。」とぞ申しける。

安藝守清盛は三條を河原へうち出でて、筋違に東河原にうち渡

A. かつりあふ
 B. 推りあふ
 C. つかひあふ
 D. 中ひあふ
 E. 邦建
 F. なたが
 G. 清盛をだに
 H. 谷はぬ敵
 I. 柏原天皇
 J. 第五十代桓武天皇
 K. 柏原天皇に葬るよつ
 L. 柏原天皇とも申す
 M. 清和天皇
 N. 第五十六代
 O. 源經基のこと、清和天皇第六の皇子貞純親王の長子、故に六孫王といふ
 P. 八幡殿
 Q. 源義家

り、堤を上りに北へ向つてぞ歩ませける。その勢の中より、五十騎許先陣に進んで押寄せたり。「此所を固めたまふは誰人ぞ。名のらせ給へ。かく申すは安藝守殿の郎等に、伊勢國の住人古市伊藤武者景綱。」同じき伊藤五、伊藤六。」とぞ名のりける。八郎これを聞き、汝が主の清盛をだに合はぬ敵と思ふなり。平家は柏原天皇の御末なれども、時代久しくなり下れり。源氏は誰かは知らぬ、清和天皇より爲朝までは九代なり。六孫王より七代、八幡殿の孫六條判官爲義が八男、鎮西八郎爲朝ぞ。景綱ならば引退け。」とぞのたまひける。

景綱、昔より源平兩家天下の武將として、違救の輩を討つに、兩家の郎等大將を射る事互にこれあり。同じ郎等ながら、公家にも知られ參らせたる身なり。下藹の射る矢、立つか立たぬか御覽ぜよ。」とて、よつ引いて射たれども、爲朝これを事ともせず、合

P. 善道の人向
 Q. いか事なる

三年竹
 堅くて強き矢

裏かく

曹司

舌を振ふ

金澤の城
 今秋田縣仙北郡金澤町にその遺趾がある

はぬ敵と思へども、汝が言葉の優しきに、矢一つ賜はらむ、受けて見よ。かつは今生の面目、または後生の思出にもせよ。」とて、三年竹の節近なるを少し押磨いて、山鳥の尾を以てはいだるに、七寸五分の丸根の篋中過ぎて、篋代のあるをうち食はせ、暫し保つてひやうと射る。眞先に進んだる伊藤六が胸板かけず射通し、餘る矢が伊藤五が射向の袖に裏かいてぞ立つたりける。六郎は、やにはに落ちて死ににけり。

伊藤五この矢を折りかけて、大將軍の前に參つて、八郎御曹司の矢御覽候へ。凡夫の所爲とも覺え候はず。六郎既に死に候ひぬ。」と申せば、安藝守を始めて、この矢を見る兵ども、皆舌を振つてぞ恐れける。景綱申しけるは、彼の先祖八幡殿、後三年の合戦の時、出羽國金澤の城にて、武則が申しけるは、君の御矢に中る者、鎧冑を射通されずといふ事なし。抑、君の御弓勢を確に拜み

A. あまもうのどうか
 B. ありあつた
 C. 行けよ
 D. 威をなす
 E. 明きよきことにていよ
 F. あかけらぬことあり
 G. 引返すまで返さるか
 H. 引返すまで返さるか
 I. 引返すまで返さるか
 K. 引返すまで返さるか
 L. 引返すまで返さるか
 M. 引返すまで返さるか
 N. 引返すまで返さるか

澤瀉

奉らばや。」と望みければ、義家^革よき鎧三領重ね、木の枝にかけ
 て、六重を射通し給ひければ、鬼神の變化とぞ恐れける。これよ
 り愈、兵ども歸服しけりと申し傳へて聞くばかりなり。眼前に
 かゝる弓勢も侍るにや、あな怖し。」とぞおぢあへる。
 かく口々に言はれて、大將宣ひけるは、必ず清盛がこの門を承
 つて向ひたるにもあらず。何となく押寄せたるにてこそあれ、
 何方へも寄せよかし。さらば東の門か。」とあれば、兵皆「それ
 この門近く候へば、若し同じ人や固めて候らむ。唯北の門へ向
 はせ給へ。」と言へば、さも言はれたり。今は程なく夜も明けな
 むず。然れば小勢に大勢、駈け立てられむも見苦しかりなむ。」
 とて引退く所に、嫡子中務少輔重盛、生年十九歳、赤地の錦の直垂
 に、澤瀉をどしの鎧に、白星の冑を著、二十四差いたる中黒の矢負
 ひ、二所籐の弓持つて、黄河原毛なる馬に乗り、進み出でて、救命を

あるべうもなし
 O. 引返すまで返さるか
 P. 引返すまで返さるか
 Q. 引返すまで返さるか
 R. 引返すまで返さるか
 S. 引返すまで返さるか

剛の者
かたかは破り

たとい…とい

をこの高名

蒙つて罷り向ひたる者が、敵陣こはしとて引返す様やあるべき。
 續けや若者ども。」とて、駈け出でられけるを、清盛これを見て、あ
 るべうもなし。あれ制せよ者ども。爲朝が弓勢は目に見えた
 る事ぞかし。過すな。」とのたまひければ、兵ども前に馳せ塞が
 りければ、力なく、京極を上りに、春日表の門へぞ寄せられける。
 此所に安藝守の郎等に、伊賀國の住人山田小三郎伊行といふ
 は、またなき剛の者、かたかは破りの猪武者なるが、大將軍の引き
 給ふを見て、さればとて矢一筋に恐れて、向ひたる陣を引く事や
 ある。たとひ筑紫の八郎殿の矢なりとも、伊行が鎧はよも通ら
 じ。五代傳へて軍に遭ふ事十五箇度、我が手に取つても、たびた
 び多くの矢どもを受けしかど、未だ裏をばかゝぬものを。人々
 見給へ、八郎殿の矢一つ受けて物語にせむ。」とて駈け出づれば、
 「をこの高名はせぬに、如かず。無益なり。」と同僚ども制すれど

A. 一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、一百、一百〇一、一百〇二、一百〇三、一百〇四、一百〇五、一百〇六、一百〇七、一百〇八、一百〇九、一百一〇、一百一〇一、一百一〇二、一百一〇三、一百一〇四、一百一〇五、一百一〇六、一百一〇七、一百一〇八、一百一〇九、一百一〇、

一定
射させむす

も元より言ひつる言葉をかへさぬ男にて、夜明けて後に傍輩の、『いで八郎の矢目見む。』と言はむには、何とかその時答ふべき。されば日頃の高名も失せなむ事の無念なれば、よし／＼人は續かずとも、おのれ證人に立つべし。』とて、下人一人相具して、黒革をどしの鎧に、同じ毛の五枚冑を猪頸に著、十八差いたる染羽の矢負ひ、塗籠籐の弓持ち、鹿毛なる馬に黒鞍置いて乗つたりけり。門前に馬を駈け据ゑ、物その物にはあらねども、安藝守の郎等伊賀國の住人山田小三郎伊行、生年二十八。公家にも知られ奉りし山田莊司行末が孫なり。山賊強盜を搦め取る事は數を知らず、合戦の場にもたび／＼に及んで、高名仕つたる者ぞかし。承り及ぶ八郎御曹司を一目見奉らばや。』と申しければ、爲朝一定きやつは引き設けてぞ言ふらむ。一の矢をば射させむす。二の矢を番はむ所を射落さむす。』と宣ひて、白蘆毛なる馬に、金

縫ひ様

かせがれ

鎌

保元物語
著者不明、或は葉室時長の作ともいふ、保元の亂の顛末を記した軍記物語。

覆輪の鞍置いて乗つたりけるが、駈け出でて、鎮西八郎これにあり。』と名のり給ふ所を、元より引き設けたる矢なれば、弦音高く切つて放つ。御曹司の弓手の草摺を縫ひ様にぞ射切つたる。一の矢を射損じて、二の矢を番ふ所を、爲朝よつ引いてひやうと射る。山田小三郎が鞍の前輪より、鎧の草摺尻輪かけて、矢先三寸餘りぞ射通したる。暫しは矢にかせがれで、溜る様にぞ見えし、即ち弓手の方へ眞逆様に落つれば、鎌は鞍に留つて、馬は河原へ馳せ行けば、下人つと馳せ寄り、主を肩に引懸けて、身方の陣へぞ歸りける。寄手の兵これを見て、いよ／＼この門へ向ふ者こそなかりけれ。

(保元物語)

又
岡本綺堂
名は敬二、東京市の人、明治五年生、劇作家。

頼家
源頼朝の子、元久元年(六四)歿、年二十三。

柱
修禪寺
一名桂谷山寺眞言宗。

伊豆の國
静岡縣に屬する。

二夜 又 王

岡本綺堂

登場人物

面教師 夜叉王 源左金吾頼家

夜叉王娘 桂 下田五郎景安

同 楓 修禪寺の僧

元久元年七月十八日。

伊豆の國狩野の庄、修善寺村、桂川の畔、夜叉王住家。

藁葺の古びたる二重家體。破れたる壁に舞樂の面など懸け、正面に紺暖簾の出入口あり。下手に爐を切りて素焼の土瓶など掛けたり。庭の入口に竹にて編みたる門、外には柳の大樹、其の後ろは畑を隔てて塔の峰つゞきの山又は丘など見ゆ。

二重の上手に續ける一間は細工場にて、三方に古りたる蒲簾を下せ

り。庭前には秋草の花咲きたり。

楓、門に立ちて人を見送る體。そこに修禪寺の僧一人、燈籠を持ちて

先に立ち、續いて源頼家卿二十三歳、後ろより下田五郎景安十七八歳

頼家の太刀を捧げて出づ。

僧これく、將軍家の御お行しぢや、疎忽があつてはなりませんぞ。

楓はつと平伏す。頼家主従進み入る。夜叉王出で迎へて、

夜叉思ひも寄らぬお成とて、何の設もござりませんが、先づあれ

へお通り下されませ。

頼家は縁に腰打掛く。

夜叉して御用の趣は。

頼家問はずとも大方は察して居らう。我が面體を後の形見に

残さんと、さきに其の方を召し出し、頼家に似せたる面おもてを作れ

と、繪姿までも遣しておいたるに、日を経れども出來せず、幾度

A
丹精を凝らす
ほりどらう

歯痒う
増

はか

か延引を申し立てて、今まで打過ぎしは何たる事ぢや。
五郎 多寡が面一箇の細工、如何に丹精を凝らすとも百日とは費
すまい。お細工仰せ付けられしは當春の初、其の後已に半年
をも過ぎたるに、いまだ献上いたさぬとは餘りの懈怠。最早
猶豫は相成らぬと、上様の御機嫌散々ぢやぞ。
頼家 予は生まれ付いての性急ぢや。いつまで待てど暮らせど、
増明かず、餘りに齒痒うおぼゆるまゝ、此の上は使など遣すこ
と無用と、予が直々に催促に參つた。おのれ何故に細工を怠
り居るか。仔細をいへ。仔細を申せ。
夜又 御立腹恐れ入りました。ござります。勿體なくも、征夷大將
軍源氏の棟梁のお姿を刻めとあるは、職の名譽、身の面目、いか
でか等閑に存じませうや。御用承りて已に半年、未熟ながら
も腕限り根限りに、夜晝となく打ちましても、意に適ふほどの

A
五
エ

夜又

羅刹

魂魄
五體
湊



もの一箇も無く、更に打ち替へ作り替へて、心ならずも延引に
延引を重ねましたる次第、何とぞお察し下さりませ。
頼家 え、催促の都度、同じ事を……。其の申譯は聞き飽いたぞ。
五郎 此の上は唯延引とのみでは相濟むまい。何時の頃までに
は必ず出來するか。豫め期日を定めてお詫びを申せ。
夜又 其の期日は申上げられませんが。左に鑿を持ち右に槌を持
てば、面はたやすく成るものと思召すか。家を作り塔を組む
番匠などとは事變りて、これは、生無き粗木を削り、男女夫人、
夜又 羅刹ありとあらゆる善惡、邪正の魂魄を打ち込む面作師。
五體にみなぎる精力が兩の腕に自ら湊る時、我が魂魄は流る
ごとく彼に通ひて始めて面も作れます。たゞし、其の時
は半月の後か、一月の後か、或は一年二年の後か、われながら確
とはわかりません。

A. 夜叉王

二夜又王

六

三島神社
静岡縣田方郡三島町
にある官幣社、祭神
は事代主命
疝癰 疝癰 疝癰
冥利 冥利 冥利

僧 これ〱夜叉王殿。上様御自身も仰せらるる如く、至つて御性急でおはしますぞ。三島神社の放し鰻を見るやうに、ぬらりくらりと取り止めの無いこと申上げたら、御疝癰が愈募らうほどに、こなたも職人冥利、何日の頃までと日を限つて、確と御返事を申すがよからう。石段

夜叉 ぢやというても出来ぬものはなう。

僧 何の、こなたの腕で出来ぬ事があらう。面作師も多くある

中で、伊豆の夜叉王といへば、京鎌倉までも聞えた者ぢやに、

夜叉 さあ、それ故に出来ぬといふのぢや。わしも伊豆の夜叉王

といへば、人にも少しは知られた者。たとひお咎め受けうと

も、己が心に染まぬ細工を世に残すのは、如何にも無念ぢや。

頼家 何、無念ぢやと……さらば如何なる祟を受けうとも早急

には出来ぬといふか。

A. 朝あさのあさのあさのあさ

夜叉 恐れながら早急には……

頼家 む、おのれ覺悟せい。疝癰募りし頼家は、五郎の捧げた太刀引取つてあはや抜かんとす。

奥より桂走り出で、

桂 まあ〱お待ち下さりませ。

頼家 え、退け〱。

桂 先づお鎮まり下さりませ。面は唯今献上いたしまする。

なう父様。

と、顧みれども、夜叉王は黙して答へず。

五郎 何、面は既に出来して居るか。

頼家 え、おのれ前後不揃の事を申し立てて、子を嘲かうでな。

桂 いえ〱、嘘偽ではござりません。面は確に出来して居り

まする。これ父様、もう此の上は是非がござんすまい。

二夜又王

七

A. だめうそ

楓 ほんに然うぢや。昨夜漸く出来したといふ彼の面を、寧ろ
献上なされては……。

僧 それがよい、それがよい。こなたも凡夫ぢや。名も惜しか
らうが、命も惜しからう。出来した面があるならば、早う上様
に差上げて、御慈悲を願ふが上分別ぢやぞ。

夜又 命が惜しいか、名が惜しいか、こなた衆の知つた事でない。
黙つておゐやれ。

僧 さりとて、これが見てゐられうか。さあ娘御、其の面を持つ
て来て、ともかくも御覽に入れたが可いぞ。早う〜。

楓 あい〜。

桂 細工場へ走り入りて、木彫の假面を入れたる箱を持ち出づ。桂受取
りて頼家の前に捧ぐ。頼家無言にて少しく解けたる體なり。

桂 嘘偽ならぬ證據、これ御覽下さりませ。

A. だめうそ

頼家 假面を取りて打眺め、思はず感歎の聲をあげて、

頼家 おゝ見事ぢや。好う打つたぞ。

五郎 上様御顔に生き寫しぢや。

頼家 む〜。

と、飽かず打まもる。僧はしたり顔に、

僧 さればこそいはぬ事か。それ程の物が出来してゐながら、

とからう漣つて居られたは、夜又王殿も氣の知れぬ男ぢや。は

は〜。

夜又王、容を改めて、

夜又 何分にも我が心に適はぬ細工。人には見せじと存じまし
たが、斯う相成つては致し方もござりません。方々には其の
面を何と御覽なされます。

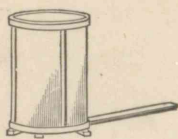
頼家 さすがは夜又王、天晴のものぢや。頼家も満足したぞ。

鑑識

夜又 天晴との御賞美は、憚りながらお鑑識違ひ。それは夜又王
 が一生の不出來。よう御覽じませ。面は死んで居りまする。
 五郎 面が死んで居るとは……
 夜又 年來數多打つたる面は生けるが如しと人もいひ、我も許し
 て居りましたが、不思議や、此の度の面に限つて、幾度打ち直し
 ても生きてる色なく、魂魄も無き死人の相……それは世に
 ある人の面ではござりません。死人の面でござりまする。
 五郎 そちはさやうに申しても、我等の眼には矢張り生きてる人
 の面……。死人の相とは相見えぬがなう。
 夜又 いや、どう見直しても生ある人ではござりません。し
 かも眼に恨を宿し、何者かを呪ふが如き、怨靈怪異なんどの類
 ……
 僧 あ、これ、其のやうな不吉の事は申さぬものぢや。御意

怨靈

A. 結構



雪洞

に適へば、それで重難。有難く御禮を申されい。
 頼家 む、とにもかくにも此の面は頼家の意に適うた。持ち歸
 るぞ。
 夜又 たつて御所望とござりますれば……
 頼家 お、所望ぢや。それ。
 頸にて示せば、桂は心得て假面を箱に納む。頼家立つ。五郎も立つ。
 桂、箱を捧げて庭におり立つ。
 僧 やれ、これ、これで愚僧も先づ安堵いたした。夜又王殿、明日
 又逢ひませうぞ。
 頼家 行きかゝりて物に躓く。
 頼家 お、何時の間にか暗うなつた。
 僧 進み出でて桂に雪洞を渡す。桂、假面の箱を僧に渡し、雪洞を持つ
 て案内す。夜又王はちつと思案の體なり。

楓 父様、お見送りを……。

夜又王始めて心附きたる如く、楓と共に門口に送り出づ。
五郎そちへの御褒美は改めて沙汰するぞ。



(劇) 王 又 夜

頼家等相前後して出で行く、
夜又王起ち上つて雲時黙然
として沈思しるたりしがや
がてつか／＼と縁に上り、細
工場より槌を持ち來りて、壁
に懸けたる種々の假面を取
下げ、あはや打碎かんとす。
楓は驚き取纏りて、

楓 あゝこれ、何となさる。お前は物に狂はれたか。
夜又 **切羽**詰りて是非に及ばず、拙き細工を献上したは、悔やんで

胎

もかへらぬ我が不運。あのやうな面が將軍家の御手に渡り
て、これぞ伊豆の住人夜又王が作と寶物帳にも記されて、百千
年の後までも笑を贈さば、一生の名折れ、末代の恥辱。所詮夜
又王の名は廢つた。職人も今日限り、再び槌は持つまいぞ。
楓 さりとは短氣でござりませう。如何なる名人上手でも、細
工の出来不出来は時の運。一生の中に一度でも天晴名作が
出来ようならば、それが即ち名人ではござりませんか。

夜又 むゝ。

楓 拙い細工を世に出したが、さ程無念と思召さば、これから愈
精出して、世をも人をも駭かす程の立派な面を作り出し、恥を
雪いで下さりませ。

と、縋りて泣く。夜又王答へず、思案の眼を瞑ちたり。

(夜 又 王)

芳賀矢一
福井市の人、國學者
文學博士、前國學院
大學長、昭和二年歿、
年六十一。

魏
曹操

字は孟德、魏の武帝、
漢の建安二十五年
(西曆三〇)歿、年六十
六。

月明らかに

月明ラカニ星稀ニ鳥
鵲南に飛ブ、曹操。

(短歌行)

フレデリック大王

西曆二六六年歿、年七
十四。

サンスシー宮

ベルリンの近郊ボツ
ダムに在る。

景慕

源頼光・頼信

共に満仲の子。

一二 文學と氣品

芳賀矢一

文學といふものは、人間界の飾であり、國家の誇であつて、個人から見れば、高尚な氣品の流露である。立派な文學のある國はその國の品格も一段と高く見え、文學の嗜みのある偉人は、一入懐かしい心持がする。魏の曹操はその事功の上から見ては餘り好かれぬ人物であるが、槊を横たへて、月明らかに星稀に。と、歌つた一事を思ひ出すと、何となく慕はしくなつて來る。プロシヤのフレデリック大王は賢君として名高いが、そのサンスシー宮中に佛國の文豪と交はつて、文學に耽つたことを考へると、尙更貴い感じを起す。英雄閑日月ありといふ語がしみくと身に染みて、景慕の念を生ずる。

源頼光や頼信よりも八幡太郎義家の方がえらく思はれるの

しひを拾ひて

登るべき便なき身は
木の下に、しひを拾
ひて世を渡るかな

(歴史家集)

弓張月

時鳥名をも雲居にあ
ぐるかな、弓張月の
いるに任せて。(同上)

埋木の

埋木の花さくことも
なかりしに、みのな
る果ぞあはれなりけ
る。(同上)

韻事

かりの契を

とても世にながらふ
べくもあらぬ身の、か
かりのちぎりをいか
で結ばん。



小楠公の美的

は、勿來關に馬を停めて、道もせに散る山櫻かな」と詠んだ風流、衣川に矢を番つて、衣のたてはほころびにけり」と呼び止めた情致がある爲で、これはその後の爲義にも、爲朝にも、義朝義平にも眞似の出來ぬところ。源三位頼政の「しひを拾ひて世を渡るかな」は餘り感心せぬが、「弓張月のいるに任せて」埋木の花さくこともなかりしになどの韻事があつた爲に、後世にまでその名が高くなつたのであらう。小楠公をして一層美的ならしめるのは、かりの

梓弓

歸らじとかねて思へば梓弓、なき數にいなる名をぞといむる。

波ばかりこそ

有明の月もあかしの浦風に、波ばかりこそよると見えしか。
(金葉集)

陸奥の

陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ、書きつくしてよ壺のいしぶみ。(新古今集)

覇譚

契をいかで結ばんの歌と、梓弓なき數にいなるの辭世である。平忠盛に「波ばかりこそよると見えしか」の風流があつて、眇の俄殿上人も、優にやさしい感じを與へる。これは淨海入道の及ぶところではない。頼朝の「陸奥のいはでしのぶはえぞ知らぬ」を思へば、義經や範頼を殺すほどの人とは思はれぬ。西行法師との談話にも、幾分の風流譚がまじつてゐたらうと想像せられる。その子實朝に至つては、更に歌の名手。これは源氏の武將中の第一で、曩祖八幡太郎の文學的方面は、こゝに最大の發達を遂げてゐる。頼朝の覇業は三代で亡びたが、實朝の文學は千古不朽である。文學者の文學は當然であるが、政治家なり、武人なり、他の方面の人で風流譚のあるのは、非常にその人品を高くするもので、時にはその人の缺點まで掩ふやうな心持がする。實朝が源氏の末路を飾ると同じやうに、平家の末路を飾るも

のは薩摩守忠度である。平家の公達には歌を詠んだ人は澤山あるが、忠度が都落に馬を乗り返して、俊成卿の門を叩いた一話は、最も麗はしい永久の語草である。

武士は情を知らなければならぬ、武人として文事の嗜みがなくてはならぬとは、武家の家訓として必ず教へた事柄である。

武田氏、北條氏、長曾我部氏等の家訓は皆これを歌つてゐる。それであるから、戰國時代にも風流の心得のある武人が随分多かつた。承久の役に院宣を讀み得る人がなかつたなどといふのは、ほんたうの武士のなかつた證據。北條氏康、毛利元就、太田道灌などは皆和歌風流の嗜みが深かつた。豊臣秀吉を無風流な人と思ふのは大間違ひ、吉野の花見には諸大名もそれ〴〵詠歌をものしてゐる。上杉謙信が「霜滿軍營」の一吟は、人をしてまづこれに同情せしめる所以で、その襟度の遙かに武田信玄以上だ

北條氏康

氏綱の子、小田原城に據り關東八州を風靡す。元龜元年(三三〇)歿、年五十七。

毛利元就

大江弘元の第三子、安藝國(廣島縣)の豪雄。元龜二年(三三二)歿、年七十五。

霜滿軍營

霜ハ軍營ニ滿チ秋氣清シ、數行ノ過雁月三更、越山併セ得タリ能州ノ景、サモアラバアレ家郷ノ遠征ヲ憶フハ、襟度

直江兼續
越後國(新潟縣)の人、山城守と稱する、元和五年(三三九)歿、年六十。

想望す

典型

梅田雲濱

若狭國(福井縣)の人、尊王攘夷論者、安政六年(三五九)獄死、年四十四。

橋本景岳

越前國(福井縣)の人、幕末の志士、名は綱紀、通稱左内、安政六年(三五九)歿、年二十六。

頼三樹三郎

名は醇、號は古狂生、幕末の志士、安政六年(三五九)歿、年二十五。

佐久間象山

名は啓、通稱は啓之助、開港論者、安政三年(三五二)歿、年五十四。

吉田松陰

名は矩方、通稱は寅次郎、長門國(山口縣)萩の藩士、安政六年(三五九)歿、年二十九。

僧月照

名は忍向、京都清水寺成就院の僧、西郷隆盛と親交があつた、安政五年(三五〇)隆盛と共に投身した、年四十六。

伴林光平

攝津國(大阪府)の人、幕末の志士、文久三年(三五三)歿、年五十二。

望東尼

本名は野村もと、幕末の勤王家、慶應三年(三五七)歿、年六十二。

千秋萬古

披瀝

と思はしめる最大原因である。その家來の直江兼續も、文學の素養からその風采を想望せしめる。

多くの傳説を集め得た源義經や、武將の典型と見られた加藤清正に風流韻事の傳らないのは、何となく物足りない心地がする。

梶原景時、明智光秀の、時にとつての連歌などが、やゝその憎しみを減じさせるのも、文學のお蔭である。

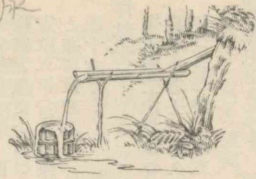
幕末の志士は必ず何物かを口吟んでゐる。藤田東湖の回天詩や正氣歌などはその尤なるもので、梅田雲濱の「妻臥病牀兒叫飢」、橋本景岳の「始知松柏後凋心」、頼三樹三郎の「誰題日本古狂生」をはじめ、佐久間象山でも、吉田松陰でも、僧月照でも、伴林光平でも、乃至は望東尼でも、或は詩に、或は歌に、その心事はながくその文學に傳つて忘れようとしても忘れられないやうになつてゐる。

これ等の志士は天下の憂に先だつて憂へた人。その志を繼いだ人々が、かへつて明治の世には公となり、侯となり、伯となつて榮爵を辱うしたが、そんな人よりも、一片の詩一首の和歌をとどめて、國難に斃れた人の方が、千秋萬古、人の情緒を動かすであらう。

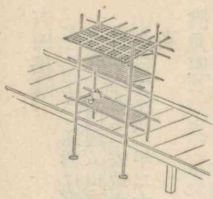
文學は廣い意味でいへば固より和歌のみに限らぬ。しかし日本では文學の他の方面は、從來閑却せられて居つたので、小説や戯曲に意見を吐露したり、理想を披瀝したりすることはなかつた。これからはそれも出來よう。政治家でも、實業家でも、武人でも、後世に名を残さうと思ふ人は、文學に筆を染めることを心掛けるがよい。否々、平生から文學に心掛けるほどの襟度の人であつて、始めて立派な武人にも、政治家にも、實業家にもなれるのであらう。

徒然草

吉田兼好の隨筆、
吉田兼好一姓は卜部
鎌倉末期の文學者、
正平五年(1190)歿、
年六十八。
栗栖野
今の京都市東山區栗
栖野
寛文七



関伽棚



一三 徒然草抄

吉田兼好

一 神無月の頃

神無月の頃、栗栖野といふ所を過ぎて、ある山里に尋ね入る事
侍りしに、遙かなる苔の細道を踏み分けて、心細く住みなしたる
庵あり。木の葉に埋もるる笥の雫ならでは、つゆおとなふもの
なし。関伽棚に菊紅葉など折り散らしたる、さすがに住む人の
あればなるべし。かくてもあられるよと、あはれに見るほど
に、彼方の庭に、大きな柑子の木の枝もたわむになりたるが、廻
りを厳しく圍ひたりしを、少しことさめて、この木なからまし
かばと覚えしが。

(第十一 段)

二 仁和寺にある法師

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水を拜まざりければ心う
く覺えて、ある時思ひ立ちて、唯一人かちよけ詣でけり。極樂寺
高良など拜みて、かばかりと心得て歸りにけり。さてかたへの
人に會ひて、年頃思ひつる事果し侍りぬ。聞きしにも過ぎて貴
くこそおはしけれ。そも参りたる人ごとくに山へ登りしは何事
かありけむ。ゆかしかりしかど、神へ参るこそ本意なれと思ひ
て山までは見ず。とぞ云ひける。少しの事にて、先達は有ら
まほしき事なり。

(第五十二 段)

三 是も仁和寺の法師

是も仁和寺の法師、童の法師にならむとする名残とて、各遊ぶ
事ありけるに、酔ひて興に入る餘り、かたはらなる足鼎を取りて
頭にかづきたれば、つまるやうにするを、鼻を押し平めて顔を差

たわむに

圍ひたりしを、
ましかばと覺えしか

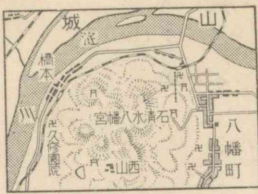
仁和寺

京都市右京區花園に

ある。

石清水

山城國(京都府)綴喜
郡男山八幡宮のこと



極樂寺

男山の麓にある寺。

高良

男山の麓にある社。

何事かありけむ

参るこそ本意なれ

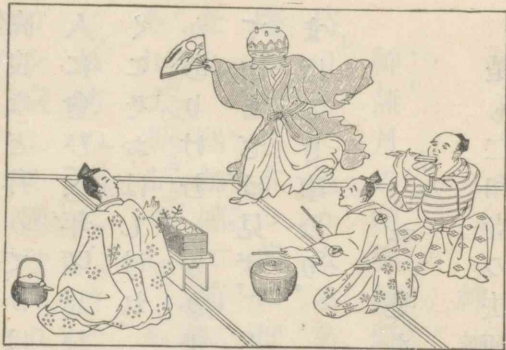
名残

かなづ
抜かれず

腫れに腫る

くすしのがり

居たりけむ有様さこ
そ…けめ



師法の寺和仁

入れて舞ひ出でたるに満座興に入る事限りなし。暫しかなで
て後抜かむとするに大かた抜かれず。酒宴ことさめていかゞ
はせむと惑ひけり。とかくすれば、頸
の廻り缺けて、血たり、只腫れに腫れ満
ちて、息もつまりければ、打割らむとす
れども容易く割れず。響きて堪へ難
かりければ、かなはですべきやうなく
て、三足なる角の上に帷衣を打懸けて、
手を引き杖をつかせて京なるくすし
のがりゐて行きけるに、道すがら人の
怪しみ見る事限りなし。くすしの許
にさし入りて對ひ居たりけむ有様さこそことやうなりけめ。
物を言ふも、くゞもり聲に響きて聞えず。「斯かる事は書にも見

耳鼻こそ…うすと
も

缺けうぐ
からき命

もろ矢

等閑 *びらり*

えず、傳へたる教もなし。」と言へば、また仁和寺に歸りて、親しき
者、老いたる母など、枕がみに寄り居て泣き悲しめども、聞くらむ
とも覺えず。かかる程に、或者の云ふやう、たとひ耳鼻こそ切れ
らすとも、命ばかりはなにか生きざらむ。たゞ力を立てて引き
給へ。」とて、藁のしべをまはりにさし入れて、かねを隔てて、頸も
ちぎるるばかり引きたるに、耳鼻缺けうげながら脱けにけり。
からき命まうけて久しく病み居たりけり。
(第五十三段)

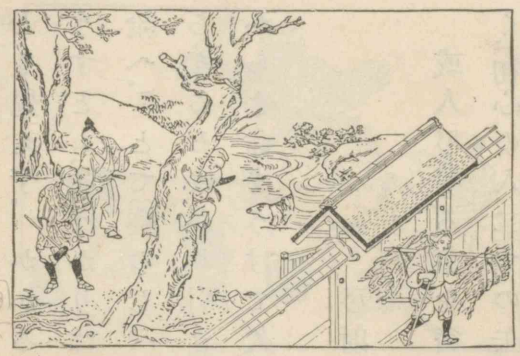
四 弓射る事を習ふに

或人弓射る事を習ふにもろ矢をた挟みて的に向ふ。師の曰
く、「初心の人、二つの矢を持つこと勿れ。後の矢を頼みて、初の矢
に等閑の心あり。毎度たゞ得失なく、この一矢に定むべしと思
へ。」といふ。僅に二つの矢、師の前にて、一つを疎かにせむと思

期す

一念
何ぞ…難き

おきてて



高名の木登り

いと危く見えし程はいふこともなくて下るときに軒だけばかりになりて、過すな心して下りよ。」と、言葉をかけ侍りしを、か

はむや。懈怠の心、自ら知らずと雖も、師これを知る。この戒、萬事に互るべし。道を學する人、夕には朝あらむ事を思ひ、朝には夕あらむことを思ひて、重ねて懇に修せむ事を期す。況や一刹那のうちに於て、懈怠の心ある事を知らむや。何ぞたゞ今の一念に於て直ちにする事の甚だ難き。

五 高名の木登り

(第九十二段)

聖人の戒にかなへり
「君子安ケレド危キヲ忘レズ」治ニ居テ亂ヲ忘レズ」の類

時頼

北條時頼、鎌倉五代の執權、弘長三年(二九三)歿、年三十七。

守

相模守時頼をさす。入れ申す

城介義景
秋田城の介安達義景
秋田城の介出羽國(秋田縣)秋田城を管する役。
けいめい(經營)

ばかりになりては、飛び下るとも下りなむ。いかにかくいふぞ。」と、申し侍りしかば、その事に候。目くるめき、枝危き程は、おのれが恐れ侍れば申さず。過は安き處になりて必ず仕る事に候。」といふ。あやしき下藤なれども、聖人の戒にかなへり。鞠も難き所を蹴出して後易く思へば、必ず落つと侍るやらむ。

(第九九段)

六 相模守時頼の母

相模守時頼の母は松下禪尼とぞ申しける。守を入れ申さるる事ありけるに、煤けたる明障子のやぶればかりを、禪尼手づから小刀して切り廻しつゝ、張られければ、せうとの城介義景、其の日のけいめいして候ひけるが、給はりてなにがし男にはらせ候はむ。さやうの事に心得たる者に候。」と、申されければ、其の男

た易し
さわくと

聖人の心
子曰ク、約ヲ以テ之
ヲ失フ者ハスクナシ
(論語里仁篇)

尼が細工によもまさり侍らじ。とて、なほ一間づつはられけるを、義景、みなを張りかへ候はむは、遙かにた易く候べし。まだらに候も見苦しくや」と、重ねて申されければ、尼も後はさわくと張りかへむと思へども、今日ばかりはわざとかくてあるべきなり。物は破れたる所ばかりを修理して用ふる事ぞと、若き人に見ならはせて心づけむ爲なり」と、申されける、いとありがたかりけり。世を治むる道、儉約を本とす。女性なれども聖人の心にかよへり。天下を保つ程の人を子に持たれける、まことにただ人にはあらざりけりとぞ。

(第百八十四段)

柳田國男

兵庫縣の人、明治八年生、民俗傳説研究家、前貴族院書記官長。

一四 心の窓

柳田國男

眼が心の窓だといふ諺は、旅行をする者には一番よく分る。二十の紹介狀、五十の名刺を配つて歩くよりも、更に遙かに旅行に好都合なのは、自分の心の窓の磨硝子で無いことと、田舎の人の心の窓の風通しの良いこととである。よく旅から歸つて、某地は人氣が善い、悪いのといふ人も、その確信を證據立てるまでに、多數の地方人と交渉又は取引をしたのではない。やはり口ではいひ現し得ぬ眼の交通が、次第に空な感じと思はれぬまでに強く、その印象を感受したからである。電車や汽車の中でも色々な眼の光に接するが、それは主として草野を行くやうな變化の興味である。これに反して、村里に入れば、その種類がほぼ揃つて居るために、言語に代る程度に濃厚に、いよく人を動

備

かすのである。

窓の譬をなほ繰返すならば、旅人は別に所在も無いために、始終この窓にもたれて居るのである。その窓の前を内部の分らぬ多数の建物が動いて行く。建物には各また窓がある。覗かずに居られぬではないか。又あちらでも窓から覗いて居るらしい。勿論中で喧嘩をしたり、晝寝をしたりして居るものも随分あるが、もともとかういふ旅人を見るために開けて置く窓だから、一寸でも利用しようとするのが普通である。田舎は全體に口の少い社會だから、我々が言語を備ひ又は耳を利用するやうな場合にも、これらの人々は眼の窓だけで済まさうとする。従つて見るためよりも見られるために、語る能はざるものを語らんとするがために、田舎の人の眼は遙かに有効に役立つて居るやうである。都會の人の眼は多くは疲れて居るが、田舎の人

今度の旅
大正九年東北地方に
旅行したことをいふ。

石の巻・渡波
共に宮城縣牡鹿郡の
町。

の眼はよく澄んで居るから、他の建物の中のものもまたよく映るのであらう。



男 國 田 柳

今度の旅にも、私は何十回となく小兒等から眼を以て商賣を問はれ、行先を尋ねられ、又は手に持つ本や煙草の名を聞かれたが、別にそれ以外に、それより交渉は淡いが、人間としては遙かに有力な宣言を、この眼を通して二度まで聞いた。

石の巻から乗つた自動車が、岡の麓の路を曲つて、渡波の松林に走り著かうとする時、遠くに人と馬と荷車との一團が斜に横たはつて休んで居ると見た瞬間に、その馬が首を回して、車を牽

いたまゝ横路に飛び込んだ。小學校を出たばかりかと思ふ小さな馬方が、綱を手にしたまゝ、轉んだと見た時には、もうその車の後ろの輪が一つ、ちやうどその馬子の腹の上を軋つて過ぎた。それでもその子は眞直ぐに立つて、三足ほど馬を追つて、振返つて一寸こちらを見て、腹を両手で抑へて又倒れた。反對の側の輪に力がかゝつて居たともいひ、路面に深い凹みがあつて、恰もその中に轉んで居たからともいはれて、正確ではないが、とにかくその時は助つて病院に連れて行かれた。たゞこの一瞬間の子供の眼の色には、人の一大事に關する無數の疑問と斷定があつた。その中で自分に問はれたやうに感じたのは、折も折、この刻限に、どうしてこゝを通り合はせることになつたかといふ疑問であつた。そしてそれが又我々の朝から色々の手配の狂ひ、計畫の數回の變更が、ちやうどこの場へ今我々の自動車を通

らせることになつたのを、一種の宿命のやうにも悟つたやうでもあつた。

十五濱
宮城縣桃生郡の村。
追波川

北上川の分流。

釜谷

宮城縣桃生郡大川村
の字。

窠扶斯

今昔物語
日本部三十卷、天竺部十五卷、震旦部十五卷から成る古今の雑話を集録せる書
著者不明

獵人

中一日おいて次の日には、自分は十五濱じごはまからの歸りに、追波川を上つて來る發動機船の上に居た。大雨の小止みの間に、釜谷の部落を見ようとして甲板に立つと、曳船を頼むといつて、濡れた舟が一つ岸に繋いである處へ、一群の人がおりて來る。石の卷の醫者へ連れて行く窠扶斯の病人と聞いて、舟の事務員が色面倒な條件ばかり出すのを、一々首をもつて承認して、釣臺を擔いで乗らうとする。年取つた女が二人ついて來る。荷の輕さが子供らしいので、なるべくこの窓だけは覗くまいとして居たのに、やはりはずみがあつて、その子と眼を見合はせた。今昔物語に、鹿の命に代らうとした聖が獵人と松明の光で眼を見合はせたといふ類の遭遇で、殆ど凡人の發心を催すやうな眼であ

つた。多分は出水の川船の數里の旅行の後、石の巻で亡くなつたことと思ふが、それは十一二許りの女の子であつた。草の堤をやゝ下りがけに船を見ようとして私を見つけたのである。眼の文章は詩人にも譯し得まいが、或は自分を醫者かと思つて、御醫者さんなら遠くへ往かずとも濟むのにと考へたらしかつたのがあはれてあつた。

これらの場合にでもなければ、子供の眼は常に幸福である。よその多數の幸福を知らずに安々とした眼をして居るのが、旅人にとつては、風景よりも、歌謡よりも、更に大なる天然の一慰安である。

(雪國の春)

講世の道 西郷南洲

西郷南洲

名は隆盛、陸奥國鹿兒島縣の藩士、明治十年歿、年五十一。

極功 母意云々

母意云々

論語子罕第九にある。

我(自分)他人(別)

固(頑固)

現(現)懼(戒)慎(慎)

驕(驕)矜(矜)矜(矜)矜(矜)

つし(つし)か(か)自(自)ら(ら)愛(愛)す(す)る(る)

其(其)の(の)成(成)し(し)得(得)た(た)る(る)事(事)業(業)を(を)負(負)み(み)荷(荷)も(も)我(我)が(が)事(事)を(を)仕(仕)遂(遂)げ(げ)ん(ん)と(と)て(て)拙(拙)き(き)仕(仕)

事(事)に(に)陥(陥)り(り)終(終)に(に)敗(敗)る(る)も(も)の(の)に(に)て(て)皆(皆)自(自)ら(ら)招(招)く(く)な(な)り(り)故(故)に(に)己(己)に(に)克(克)ち(ち)

て(て)睹(睹)み(み)聞(聞)か(か)ざ(ざ)る(る)所(所)に(に)戒(戒)慎(慎)す(す)る(る)も(も)の(の)な(な)り(り)。

故(故)に(に)己(己)に(に)克(克)ち(ち)

て(て)睹(睹)み(み)聞(聞)か(か)ざ(ざ)る(る)所(所)に(に)戒(戒)慎(慎)す(す)る(る)も(も)の(の)な(な)り(り)。

一(一)。

一五 敬天愛人

西郷南洲

道は天地自然のものなるゆゑ、講學の道は敬天愛人を目的とし、身を修するに、克己を以て終始せよ。己に克つの極功は、母意「母必母固母我」と云へり。總じて人は己に克つを以て成り、自ら愛するを以て敗るるぞ。能く古今の人物を見よ。事業を創起する人、其の事大抵十に七八迄は能く成し得れ共、残り二つ三つを終るまで成し得る人の稀なるは、初は能く己を慎み、事をも敬する故、功も立ち名も顯るるなり。功立ち名顯るるに隨ひ、いづしか自ら愛する心起り、恐懼戒慎の意弛み、驕矜の氣漸く長じ、其の成し得たる事業を負み、荷も我が事を仕遂げんとて拙き仕事に陥り、終に敗るるものにて、皆自ら招くなり。故に己に克ちて、睹み聞かざる所に戒慎するものなり。

至誠と推し（ひたすら）

詐謀（いつはりばかり）

事宜次第（あつちのついで）

迂遠（ひり）

詮（まか）

困厄（困難）

逢ふものたはは（逢ふものたはは）

事大小となく正道を踐み、至誠を推し、一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦其の差支を通せば、後は事宜次第工夫の出来るやうに思へ共、屹度策略の患ひ生じ、事必ず敗るるものぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なるやうなれども、先に行けば成功は早きものなり。人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡くし、人を咎めず、我が誠の足らざるを尋ぬべし。過を改むるに、自ら過てりとさへ思ひつかばそれにてよし。其の事をば棄てて顧みず、直ちに一步踏み出すべし。過を口惜しく思ひ、取繕はんと心配するは、譬へば茶碗を割り其のかけを集めて合はせ見ると同じく、詮もなきことなり。道を行ふ者は、固より困厄に逢ふものならば、如何なる艱難の地に立つとも、事の成否身の死生等に、少しも關係せぬものなり。

口々（口々）

信仰悦服（信仰悦服）

心から悦んで服従（心から悦んで服従）

事には上手下手あり、物には出来る人出来ざる人あるより、自然心を動す人もあれ共、人は道を行ふものゆゑ、道を踏むには上手下手も無く、出来ざる人も無し。故に只管道を行ひ道を樂しみ、若し艱難に逢うて之を凌がんとすれば、彌道を行ひ道を樂しむ可し。予壯年より艱難と云ふ艱難に罹りしゆゑ、今はどんな事に出合ふとも、動搖は致すまじ、それだけは仕合せなり。天下後世までも、信仰悦服せらるる者は、唯是一個の誠なり。古より父の仇を討ちし人、其の數擧げて數へ難き中に、獨り曾我兄弟のみ、今に至るまで兒童婦女子も知らざる者あらざるは、衆に秀でて誠の篤きが故なり。誠ならずして譽めらるるは、僥倖の譽なり。誠篤くば、たとひ當時知る人なくとも、後世必ず知己あるものなり。

僥倖（まこと）

（南洲遺訓）

山縣有朋
山口縣の人、大勳位
公爵、元帥、陸軍大
將、大正十二年歿
年八十六。

故山に歸養

明治六年

警咳に接す

舊雨の感

滄桑の變

滄海變ジテ桑田トナ
ルヲ見ル。 神仙傳

料らざりき...とは

亡狀一滅亡

なせりき

一六 西郷隆盛に與ふ

山縣有朋

山縣有朋、頓首再拜、謹んで書を西郷隆盛君の幕下に呈す。有朋君と相識る茲に年あり。君の心事を知るまた甚だ深し。曩に君の故山に歸養せしより、久しくその警咳に接する事を得ざりしかど、舊雨の感、豈一日も有朋の懷に往來せざらんや。料らざりき、一旦滄桑の變に遭ひて、君と旗鼓の間に相見るに至らんとは。
君が歸郷の後、世の鹿兒島士族の亡狀を議するもの、皆いはく、「西郷實に其の巨魁たり、謀主たり」と。
然れども、有朋はひとりこれを斥けて、然らずとなせりき。然るに今かくの如し。嗚呼、また何をかいはん。
しかれども、ひそかに思ふに、事のこゝに至れるは、蓋し勢の止

あらざりしな
らん
名なき軍

佐賀の賊

明治七年江藤新平叛

す。 熊本・山口の叛徒

明治九年、熊本に敬
神黨起り、次いで前
原一誠等山口に反す。

韜晦

奇貨

讒誣

蒼生

むを得ざるに出でしものにて、君の素志にてはあらざりしならん。若し君にして初より眞に異圖を懷きしならば、何ぞかゝる名なき軍をかゝる機を失へる時に起さん。薩軍の今公布するところを見るに、罪を一二の官吏に問はんとするに過ぎず。これ果して擧兵の名を得たりといふべきか。佐賀の賊まづ誅せられ、熊本・山口の叛徒次いで敗れ、今や天下の士民漸くその自省の志を立てんとす。しかして、薩軍突如としてこゝに兵を擧ぐ、これ果して擧兵の機を得たりといふべきか。君の明識なる、豈これを知らざることあらんや。
説者またいはく、天下不良の徒は、西郷の山林に韜晦したるを奇貨とし、これによりて功名を萬一に僥倖せんとする念を懷き、その辭を巧にして、ひたすら朝廷の政務を讒誣し、西郷に説くに、「君出でずんば蒼生をいかにせん。君にして義兵を擧げなば、天

洞察
浸潤
衆口金を燦かす

下靡然としてこれに向はん。』との旨を以てせしならん。西郷の卓識なる、その讒誣たるを洞察するに難からざりしなるべしと雖も、その浸潤のいたす所、實に衆口金を燦かす勢ありて、知らず識らず、遂に事を擧ぐるに至りしならん。』と。聞く者皆これを然りとす。しかれども、有朋ひとりこれを斥けて然らずとなす。何となれば、若し君にしてまことにその志ありしならば、單騎輦下に來りて、從容と



西郷隆盛

して利害のあるところを上言するにおいて、何の妨げもあらざるべければなり。思ふに、君が多年育成せし壯士輩は、はじめより、時勢の真相を

を察する

教唆

西郷隆盛筆
盡人事、俟天命
應長谷場君需
南洲書

も知り、人倫の大道を履踐する才識をも備へたる者なるべけれど、かの不良の徒の教唆により、或はその一身の不遇によりて、その不平の念を高め、遂に一轉して悲憤の念を懷き、再轉して叛亂の心を生ずるに至りしならん。しかしてその名を問へば、則ち

冬人多信之為

西郷隆盛筆

いはく、西郷の爲にするなり。』と。情勢既にこゝに至る。君が平生故舊に篤き情は、空しくこれを看過して、ひとり餘生を完うするに忍びざりしならん。されば君の志は、はじめより生命を以て、壯士輩に與へんと期せしに外ならざりしならん。君が人

生ナレドモの毀譽クイヨを度外タクガに置き、天下後世の議論ギョを顧みざるもの故ユなきにアあらず。嗚呼、君の心事シンジまことに悲しからずや。有朋ユウポンことに君を知る深きが故に、君のために悲しむ心ココロまた切なり。然れども事既にこゝに至る。これをいふとも、何の益かあらん。顧みれば交戦以來既に數月を過ぐ。兩軍の死傷、日々幾百なるかを知らず。朋友相殺し、骨肉相食み、人情の忍ぶべからざるを忍びぬ。かゝる戦の如きは、古來例なきところなり。しかして戦士の心を問へば、共に寸毫の恨みあるにあらず。たゞ王師はその職務のために薩軍はその帥西郷のために戦ふといふに過ぎず。それ一國の壯士を率ゐて、よく天下の大軍に抗し、劇戦數旬、百敗撓ノまざるもの、既に君が威名の實を天下に示すに足れり。而して今や君の麾下の勇將概ね死傷し、その軍威日々に衰へんとす。薩軍の遂に志を成すこと能はざるは、既に明らかなるにあらず。

や。君、更に何の望むところありてか、徒らに守戦を事とせんとはする。若し人の、西郷は事の成らざるを知れど、暫くその餘生を永くせんがために、敢て百千の死傷を兩軍より出だすを辭せざるなり。といふ者あらば、有朋それに向ひて何とか答へん。願はくば君早くみづから圖りて、一はこの擧の君が素志にあらざるを明らかにし、一は兩軍の死傷を明日に救ふ計をなせ。嗚呼、天下の君を議する、實に極まれりといふべし。國憲の存するところ、おのづから然らざるを得ずといへども、思ふに、君の心事を知るもの、ひとり有朋のみにあらざらん。然らば何ぞ公論の他年にさだまるなきを憂へん。故舊の情、有朋切にこれを君に冀望せざるを得ず。書に對して涕淚雨のごとく、いはんと欲することをも悉くすあたはず。君、すこしく有朋が情懷の苦を察せよ。

德富蘇峰

名は猪一郎、熊本縣の人、文久三年三三三三三、評議家、貴族院議員。

仲達

支那魏の名將、司馬懿の字。

祁山・渭水

共に支那甘肅省鞏昌府。

孔明

支那蜀の丞相、諸葛亮の字。

玄徳

支那蜀の昭烈帝、劉備の字。

一七 知 己 難

德富蘇峰

朋友にして知己ならざるものあり、知己にして朋友ならざるものあり。否、知己は敵人にもこれあるべし。かの仲達が祁山渭水の空營を按じて、天下の奇才なり。と叫びたるを觀れば、如何に彼が諸葛孔明の知己たりしや知るべし。孔明は實に二箇の知己をもてり、敵にては仲達、身方にては玄徳。人は何人とも朋友となるを得べし。情と情と相接する日は即ち朋友の出で来る時なり。觸るれば情を生じ、著すれば情を生じ、久しければ情を生じ、屢すれば情を生ず。竹馬の友同窓の友、同郷の友、同業の友、同位置の友、同臭味の友、友も亦類多し。然り、天下何人か友ならざるものあらん。少しく心をとめて談話すれば、東京より横濱に至るまでの汽車中にてすら、幾多の友人

君ならで

紀友則の歌（古今集）

絃

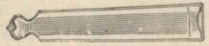
鍾子期・伯牙

共に支那戰國時代初期の人。

荆軻・高漸離

共に支那戰國時代末期の人。

筑



楊巨源

中唐の詩人。

句鵝

は得らるるにあらざや。
知己に至りては然らず。天下百千の朋友を得るは易けれど、一人の知己を得るは難し。知己とは何ぞや。我よりすれば彼に知らるるなり。彼よりすれば、我を知るなり。
君ならでたれにか見せむ梅の花
色をも香をも知る人ぞ知る

これ實に知己に對する情なり。知己實に難し。故に一の知己を得れば、殆ど一の生命を得たるよりも嬉しく、一の知己を失へば、一の生命を失ひしよりも悲し。鍾子期死して伯牙絃を絶ち、荆軻死して高漸離また筑を撃たず。その心まことに憐むべきものなり。

楊巨源の詩にいはいはく、
詩家清景在新春。
柳嫩鵝黃色未勻。

玄間

ト

鍵

東坡 蘇軾の號、宋の文學者、建中靖國元年(西曆二〇〇)歿、年六十六

重辟 蘇轍の字、軾の弟、文學者

子由

若待上林花似錦、出門皆是看花人。

と。龍を見て龍となす。誰か其の眼識に務らん。たゞ一寸の蛇を見て、早くもその雲を起し霧を吐き、茫洋として玄間を窮め、日月に薄るを知る、これ難きなり。知己の難きは、その未だ發達せざる時に於て、他日の發達を卜するにあり。そのあらはれたる嘻笑、怒罵の外に、隠れたる胸間の神祕を會得する事の難きにあり。人はその半身上は祕密なり。知己はよく鍵なくしてこの祕密を知る。固より他のわれに語るを待たざるなり。語るを待ちてこれを知るが如き、これ豈知己ならんや。

かくて、知己の感は又兄弟の間にもあり。東坡曾て獄に投ぜられて、重辟に處せられんとするを聞き、その弟子由に書を贈りていはく、

是處青山可埋骨、他年夜雨獨傷神。

未了因

生面

賈生

屈原

孟軻

孔子

周公

魯の人、名は丘、周の敬王四十一年(西曆前五一)卒、年七十三

名は且、周の文王の子、西曆前三九年歿、年五十六

キケロ ローマの文學者、西曆前四四年歿、年六十三

スキピオ ローマの勇將、西曆前八三年歿、年五十四

與君世々爲兄弟、又結來生未了因。

と。その同胞の情元より篤し。況やこれに累ぬるに、雙々知己の恩愛を以てするに於てをや。死後なほ兄弟となり、その未了因を繋がんといふ。世の兄弟にしてかくの如き知己の感あるもの、古往今來それいくばくぞ。千載の下、猶人をして欽望已む能はざらしむるに非ずや。

知己は又、敵人にあるのみならず、生面の人にもあり、或は古人に對してもあり。知己の交感、時は問はず、處を論ぜず。賈生が屈原を慕ひ、孟軻が孔子を慕ひ、而して孔子が周公を慕ひて、吾復夢に周公を見ず。といひしが如き、その言の懇到深切、感ずべきにあらずや。キケロ曰く、余に對しては、スキピオなほ生けるなり。しかして以て常に生くべし。と。嗚呼、宇宙茫茫、たゞ知己ありて以て繋ぐところあり。知己なくば人生は荒野のみ、荆

棘

棘のみ。

人は知己の爲にその憂苦患難を共にするを厭はず。甚しきは其の一身を投じて知己のために犠牲となるものあり。彼等は漫りに犠牲となるにあらず、實に知己の爲に犠牲となるなり。苟も一の知己を得る、生命を捨つるも悔いず。況や區々たる浮世の名利をや。魏徵が「人生感意氣、功名誰復論」といふ句は、實に人の深奥なる思想を吐露したるものなり。

人生の最も清福なるは知己を持てるにあり。朋友中知己を持てるは最も清福なり。しかしてその兄弟姉妹、父母の中に知己を有するが如きは清福の最も大なるものなり。かの東坡子由のごとく、風雨の夜、兄弟床をならべて千古の懷を敘するを得ば、天下またこれに優る清福なからん。

(靜思餘錄)

悔 い

魏徵 (悔ゆ)

唐の太宗の侍中、人生感意氣、唐詩選にある。

佐佐木信綱

三重縣の人、明治五年生、歌人、文學博士。

一八 冬の風物

佐佐木信綱

冬は草木も枯れ、天地の眺も荒れすさむ時であるから、歌に詠むやうな風物も、春や秋のやうに多くはない。しかし、歌は單に美しいものや、花やかなもののみを詠むものではなく、普通の目には氣がつかないやうなところにあはれを求め、美をさぐるのが、歌を詠む人の本分である。この立場で見ると、冬の自然はその荒涼たるところにまたその美しさがある。殊に冬の風物の中にも、他の時節には見られない美しい趣のあるものがある。即ち時雨とか、霜とか、雪とかいふものは、いづれも冬の寒い時候の産物で、春や秋の花や、紅葉にも劣らぬ趣ををりく、見せるものである。時雨といふものは、冬の初にをりく、降つて來る雨で、日が照つてゐるのに、急に薄く曇つて來て降つて來る趣は、夕

をりく

香川景樹
因幡國(鳥取縣)の人、
歌人、桂園派の祖、
天保十四年(三三三)歿、
年七十六。

千種有功
號は千々廻舎、權中
將正三位、安政元年
(三五)歿、年六十二。

立に似て夕立のやうな激しさがなく、なんとなく優しい美しい趣のあるものである。この時雨の眞の趣は、武藏野に建てられた都會よりも、三方に山をめぐらしてゐる京都にある。随つて眞の時雨の美しさを詠んだ歌は、江戸の歌人のよりは、京都の歌人の作に多い。東山の麓なる岡崎に住んでゐた香川景樹には、
浮き雲のあは田の奥やしぐるらむ

音羽の山ぞ見えずなりゆく

といふのがある。音羽の山は有名な清水観音のある後ろの山、栗田山はその北に連つてゐる山である。「浮き雲」は淡くといふ意味から栗田にかけて、枕詞の様に用ひたのである。こちらから見てゐると、目の前の音羽の山が曇つて、見る／＼隠れて行く。思ふに栗田山の奥は時雨れてゐるのであらうといふ意である。同じく京都に住んだ公卿の歌人千種有功の作に、



(寺園銀の雪)

淨

清

北山

京都市北部の諸山の

總稱

おくれざりけり

木下幸文

通稱は民藏、備中國
(岡山縣)の人、景樹
の門人、文政四年三
月(一)歿、年四十三。

枚方

河内國(大阪府北河
内郡)

北山の炭もてはこぶ都路に

しぐれの雲もおくれざりけり

北山から炭を運んで来る京都への街道に、その炭の荷にともな
つて、時雨がふりそゞいで来ることよといふので、北山から京都
へと炭を送つて来る道に、時雨のさとふりそゞぐ趣ある景色が、
繪のやうに詠まれてゐる。

景樹の弟子なる木下幸文の作に、

とま舟の上には月のさしながら

時雨ふるなりひら方のさと

と、いふのがある。枚方は淀川の岸で、京都から大阪への夜舟の
舟つきである。歌の意味は明瞭で、そこに泊つてゐるとま舟の
上に、月の光がさしながら時雨がうちそゞぐといふ、ありのまゝ
の景色を歌つたのである。夜でも晝でも空の光はそのまま、

荒涼

どこかひと所薄曇りして、はらくと降りそぐといふのが、時雨獨特の趣である。
次に霜もまた荒涼たるうちに一種の趣あるもの。木の葉に白くおいたのも、路の上を色どつたのも、とりぐにおもしろい。とけ霜のいまだかわかぬ草の上に

熊谷直好

周防國(山口縣)の人、景樹の高弟、文久二年(五三)歿、年八十一。

けふものどけき朝日かげかな

これは熊谷直好の作。霜どけがして、まだ乾き切らない草の上、けふもまたのどかな朝日の光が照り添ふことよといふのである。日かげのうららかな小春日和の美しさは格別なものである。この歌はその趣を詠んだので、けふもといふところに、連日の小春日和といふころが現れてゐる。

山がつか煙ふきけむあとならし

つばきのまき葉霜にこほれり

ならし
こほれり

加納諸平

遠江國(静岡縣)の人、國學者、紀州侯の臣、安政四年(五七)歿、年七十二。

これは和歌山に住んだ加納諸平が、藩侯の命で紀伊國續風土記を撰すべく、實地踏査に熊野の奥へものしたをりの作。椿の葉を巻いて烟草をのむといふ山間の古俗を詠んだのが、變つてゐる。

朝日かげまだよくささで大船の

かげの小舟にのこるはつ霜

これは大隈言道の作。言道は福岡から大阪に上るとして瀬戸内海を往復し、その時の作が少くない。これもその一つである。朝日の光がまだよくささないので、大船のかげになつてゐる小舟の上に、初霜が消えかねて残つてゐるといふので、大船のかげの小舟といふ著眼に、言道らしいおもしろさがある。

終りに、雪に至つては、まことに冬の花ともいふべきもので、野山にも、町中にも、また河邊にも眞白に降り積んだ景色は、いふば

大隈言道

筑前國(福岡縣)の人、江戸時代の歌人、明治元年歿、年七十一。

かりなく清く美しい。随つて雪の歌は古來極めて多い。殆ど冬の歌の大半は雪の歌であるといつてよいからである。ここには特に萬葉集のうちから數首を選んで述べよう。

ふる雪の白かみまで大君に

仕へまつれば尊くもあるか

これは天平十八年の正月、左大臣橘諸兄以下諸公卿が、太上天皇なる元明天皇の御所にまゐつて、雪見の御宴に侍した時、勅命によつて詠んだ歌の一つで、諸兄の作である。歌の意は、降る雪の如く眞白な白髪となるまで、天皇陛下に仕へ奉つて、かくおもしろい雪の日の宴にも列ることのできるのを思ふと、御いづくしみの有難さが、尊くも思はれることかなといふ意。「たふとくもあるか」の「か」は、かなと同じ意。時に應じて、老臣の誠忠の心を述べ奉つた作である。

天平十八年

紀元一四〇六年

橘諸兄

歌人、元明・元正・聖

武・孝謙の四朝に歴

仕、天平寶字元年二

四七歿、年七十四

元明天皇

第四十三代

降れば

紀男梶

萬葉時代の歌人

山のかひそことも見えずをとゝひも

きのふもけふも雪の降れば

同じ時紀男梶の作。山のかひは山と山の間の意。をとゝひも、きのふも、けふも連日雪の降つたために、山のはざまもそのことわからないまで、雪が降りうづんだことであるの意。雪の日の眺望をそのまゝに詠んだ作。

大宮の内にも外にもひかるまで

ふれる白雪みれどあかぬかも

同じ時、大伴家持の詠んだ作。御所の内外一面に、光りわたるまで降つた白雪の美しさは、見ても見飽きのしない美しさかなの意。尊い大内山の内外をこめて、眞白な雪が降りうづんだ景色が、いかにも清浄な感を興へる。ひかるまでの一句も、極めてよくきいてゐる。

(和歌百話)

大伴家持
萬葉時代の歌人、聖
武天皇より桓武天皇
まで六朝に歴仕、延
暦四年(二四三)歿
文法
な
寒しい
優しい
おもしろい

小林一茶
 名は信之、通稱彌太郎、信濃國(長野縣)の人、文政十年(一八二八)に没、年六十五。
 丹後の國
 京都府に屬する。

きと言ひをしふ
 をしへ
 小暗し
 初雞
 丁々とたゞく
 彌陀佛
 阿彌陀佛の略、西方、極樂世界に住するといふ佛。

一九おらが春

小林一茶

一 おらが春

昔丹後の國普甲寺といふところに、深く淨土を願ふ上人ありけり。年の始めは、世間祝事をしてさめれば、我もせむとて、大晦日の夜ひとり使へる小法師に、手紙したゝめ渡して、あすの曉にしかじかせよと、きと言ひをしへて本堂に泊りにやりぬ。
 小法師は、元日の旦、いまだ隅々は小暗きに、初雞の聲と同じく、がばと起きて、教のごとく表門を丁々とたゞけば、内より「何處より」と問ふ時、西方彌陀佛より、年始の使僧に候。」と答ふるよりはやく、上人はだしにて躍り出で、門の扉を左右へさつと開きて、小法師を上座に請じて、きのふの手紙をとりて、恭しく押戴きて讀みて曰く、

衆苦充滿

それ世界は衆苦充滿に候間、はやく我が國に来るべし。聖

と讀み終りて、おうくと泣かれけるとかや。



小林一茶

この上人、自ら企みこしらへたる悲しみに、自ら嘆きつゝ、初春の淨衣を絞りに、滴る涙を見て、祝ふとは、ものに狂へる様ながら、俗人に對して無常をのぶるを禮とすると聞くからに、佛門に於ては祝の骨頂なるべし。

それとは些か變りて、己等は俗塵に

埋もれて世渡る境涯ながら、鶴龜にたぐへての祝ひづくしも、厄拂の口上めきて空々しくおもほゆれば、から風の吹けば飛ぶ屑屋は、屑家のあるべきやうに、門松立てず、煤掃かず、雪の山路の曲

鶴

あるべきやう

なむ…ける

据ゑ
(据 5)

りなりに、今年の春もあなた任せになむ迎へける。
めでたさも中位なりおらが春
この五月に生まれたる我が娘に、一人前の雑煮の膳を据ゑ
て、

這へ笑へ二つになるぞ今朝からは

二 や せ 蛙

やせ蛙まけるな一茶これにあり
悠然として山を見る蛙かな
雀の子そこのけく御馬が通る
鳴く猫に赤ん目をして手鞠かな
けろりくわんとして鳥と柳かな
母馬が番して飲ます清水かな

鶉 臺

おらが春
一卷、小林一茶の俳
文俳句集

大螢ゆらりくと通りけり
罷り出でたるはこの藪の墓にて候
鶉の真似は鶉より上手な子どもかな
山寺や縁の上なる鹿の聲
有明や浅間の霧が膳を這ふ
一人と旅帳につく夜寒かな
椋鳥と人に呼ばるる寒さかな
ずぶぬれの大名を見る炬燵かな
大根引大根で道を教へけり
寒念佛さては貴殿でありしよな

(おらが春)

心づから

春盤
賓客

つとめて

いとなむ...めづ

らかなる

四つの始

たなびく

はだれ

二〇 春の楽しみ

春は先づ一夜の程に、あらたまの年立ちかへる朝の空の光、心づからにや、舊年に變りてのどけし。陸月はことだつとて、貧しき家にも春盤などいふ物を設く。また土器取出で、大御酒進めて、先づつとめて父母にことぶきし、つぎに自ら祝し、賓客にももてなす様など常に變りて、いとなむいみじうめづらかなる。時は今は四つの始めなれば、空の景色やうくひきかへ、こち風ゆるく吹きて氷解け、遠き山邊に霞の薄くたなびける、さまざまのものけざやかに見えて、冬の空に立變れる装、先づ春の來れるしるしあらはなり。垣根隠れに、冬より残れる雪の所々はだれに見ゆるも、去年の名残を惜しむべし。待ちわびし梅の匂、百花に先だち、春の消息を得て喜ぶべし。谷を出て高きに遷る鶯の春

もの若し

花ならで

花ならで身にしむものは鶯の、かをらぬ聲のにほひなりけり。道因法師(風雅集)

緑の松

常磐なる松の緑の春來れば、今一入の色まさりけり。源宗于(古今集)

なづさふ

韓文公

韓愈のこと、唐の人文章家、長慶四年(西暦八四四年)歿、年五十七。



鶯に梅

を迎へても、もの若き聲、初春の初音の今日に逢へる、耳とまりてこひしく、花ならで身にしむものならし。花を愛で、鳥を羨むはこれ先づ春の賜なり。これを始めとして、尚行くさき遙かに榮ゆる春の豊かなる恵たのものし。

千年も経べき緑の松も、今一入の色を増して、常に見馴れしもいや珍らしくなづさはれぬ。韓文公が「最是一年春好處」と言へりしは、早春のけしき、一年のうちにて殊にめづらかに勝

れたる故なるべし

如月の程より、よろづ皆冬の心盡きて、空の色麗かに氣色だちて、四方山も霞こめたる装、殊に曙の景色譬ふべき物なくあはれ

古の人
清少納言
日の光
日の光敷しわかねば
いその上、ふりにし
里に花も咲きけり。
布留今道(古今集)

日永くして少年の如し

けにや

老いみいはけみ

騰

莊周

支那周代の哲學者

老杜

支那唐の人

杜甫

詩人

むべし。古の人春は曙。と言ひけんも宜なるかな。日の光敷しわかねば、數ならぬ垣根の内も、冬に變りて輝き出で、草木生ひて皆顔色を生じ、花待ち顔になごやかなるけはひ嬉し。日影もやうやく長閑になりもて行けば、人の業も舊年より暇ありていそがはしからず。日永くして少年の如く、心閑かにゆたけし。海の面日和よく、浦山も麗かに霞みわたりたる景色、いと遙けし夕づけて日は既に入りぬれど、残れる光、尙久しきは、日の永きしるしなるべし。この頃は陽氣の昇るけにや、子ども紙鳶といふ物を作り、長き糸つけ、風に任せて放てば、高く上り、雲の上まで遙けくたなびくを戲とすれば、老いみいはけみ、空を仰ぎ見るもをか。野にはまた絲遊といふもの霞の如く地より立騰れり。またかげろふとも言ふ。莊周はこれを野馬と言ふ。老杜が詩に落花遊絲白日靜。と言へるもこれならし。これ皆つねには

けぢめ

消えがて

けおさる

よしさらば
續古今集
藤原爲家の歌

なきものなるが、春めきていと珍らし。また垣根の草早く萌え出づるを見るにつけても、春の氣は下より昇るけぢめいと明らかし。花もやうやく咲き續きて、梅花既にうつろひて後新なるは我が國ならぬ唐桃の花なるべし。桃紅なるはたなびく雲の面影に立つ心地す。李白きは消えがての雪の梢に残れるかと思えていと麗し。櫻の綻び出でたるこそ花に心はなけれど、人の心を動かしてえならぬ眺なれ。これ我が日の本にて、四時の花の多き中にも第一の見物なれば、梅散りて後、この頃の異花は皆けおされぬ。されど日ごろ待たせく、てやうく、咲けるが、飽くまで見る程もなく疾く散るはまた恨めし。よしさらば散るまでは見じ山櫻花のさかりを面かげにして

うしろめたし

手書は
終る
の
ゆ
す

夜は
あ
す
か
ら
う

す
い
ろ
う
た
ん
と
な
く

陳希夷
名は博、宋の人、唐
太祖に仕へた。

鶯歌暖
鶯子春猶隔リ、鶯歌
暖カニシテ正ニ繁シ。

杜甫
宋の人、唐

と古の人の詠みけんも、後の思出にせんとにや情深し。このを
りから春雨のしきく降れば、我が宿の園の櫻はいかにあるら
んとうしろめたし。柳緑に花紅にして、春の色を描き出せるは、
いと麗しき眺なり。
春やうく深くなれば、風やはらかに日暖かに、百草芳を争ひ、
群花艶を競ふ折なれば、何れの所か春のなからむや。かゝる景
色に觸れては、人の心も浮き立ちて、思ふどちかいつらね、春を尋
ねてあくがれ歩き、ひねもす花を眺め暮すこそ、目を恣にし、心を
快くするわざなれ。世の中のいみじく嬉しき事のあるが中な
るその一つなるべし。我が心の樂しみを知らざる人は、無頼の
少年の閑を偷みて、そらに行樂するに似たりと思ふべし。芳
草雨後に秀で、好花風裏に空しきものをりなり。杜甫が詩に、
「鶯歌暖正繁」と言ひ、陳希夷が「野花啼鳥一般春」と詠ぜしも、皆

春宵一刻
春宵一刻直千金、花
ニ清香アリ、月ニ蔭
アリ、歌管ノ樓臺聲
寂々タリ、鞦韆院落
夜沈々タリ。(蘇東坡)

惜花
宋の人林希逸の詩句

あたらしい夜
あたらしい夜の月と花と
を同じくは、心知れ
らん人に見せばや。

源信明 (後撰集)

春
宋の人周弼の詩句

野火燒
白居易の詩句

池塘春草
支那南北朝時代の詩
人謝靈運が夢中に得
たといふ詩句

井手の渡
京都府綾喜郡、山吹
の名所

目かれせず
巨勢山のつらく、棒
つらく、見れど

もあかす巨勢の春野
を、阪門人足 (萬葉
集)

三 春の樂しみ

この時なり。

花の夕映を見るも、殊に色勝れる心地ぞすなる。花に坐し、月
に酔ひて、二つながら兼ねたる樂しみ、春宵一刻直千金、花有清香
月有陰」といふ詩を思ひ出でられぬ。また「惜花朝起早、愛月夜
眠遲」と言へり。古人はかくこそ月花を愛でしに、今の人のあ
たら夜の月と花とにそむきて、空しく臥すはいと惜しむべし。
また夜の間の風のうしろめたきをも知らず、朝起くる事おそき
は花を惜しまざるなり。この頃夕暮は遠き山邊の焼けぬるも、
目立つべき見物なり。されば「春入燒痕青」と言ひ、また「野火燒
不盡、春風吹又生」と言へるも、燒野の草を詠ぜしなり。古詩に
「池塘春草生」と言へりしは、この頃の眼前の景色を唯ありのま
まに言へるなるべし。
彌生も半なる頃、八重山吹の風に飜るは、井手の渡しも見る心

いとまし
散りぬるは
九十の春光
春の限りの云々
惜しめども春の限りの今日の日夕暮にさへなりにけるかな
(讀人不知)(後撰集)
蘇子瞻

宋の人、號は東坡、子瞻はその字、文章家、徽宗の初年(西紀二〇年)歿、年六十六

樂訓

貝原益軒の著、益軒十訓の一、上卷、中卷、下卷に分る。貝原益軒一名は篤信、筑前國(福岡縣)の人、江戸時代の學者、正徳四年(一七三四年)歿、年八十五

文法

心地ぞすなる
思ひいづれば
言へりしは
驚かれぬるは
……と言へる……

地して賑はしければ、目かれせずながめがちなり。春の花の多かる中に、唯山茶のみ異花にかはりて盛り久し。殊更つらなして植ゑたるつらく、椿つらくに見れども飽かず。階のものと薔薇も夏を待ち顔なり。

すべて春は草木の花さきだちおくれて、いやをちにいとまし、遅く疾く咲き續き、醜醜に至りて花の事終りぬるは名残惜しと見ゆ。春の花は何れとなく咲き出づる色、殊に目驚かれぬるに、心短くて早く散りぬるは怨めし。九十の春光はいと長けれど、何くれとまぎらはしく、風雨もまたしげければ、爲す事なくはかなく過ぎて、とめあへぬ春の限りの今日の日夕暮にさへなりぬ。落花寂々たる黄昏の時は、春の名残いと惜しむべし。蘇子瞻が「青雲還一夢」と言へる、うべなるかな。

(樂訓)

長塚節

茨城縣の人、小説家、歌人、大正四年歿、年三十七

綿のやうな
浴びよう

相重

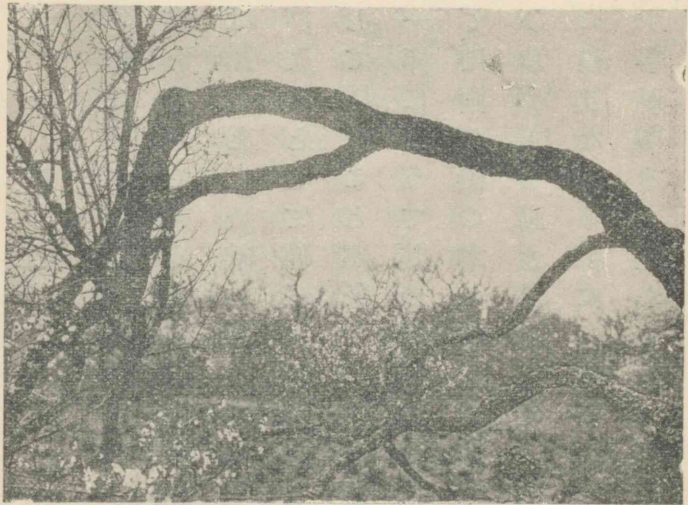
蟄 榛

蟄居冬(とびこもり)

二 土

長 塚 節

春は空から、さうして土から微に動く。毎日のやうに西から埃を捲いて來る疾風が、どうかすると、はたと止つて、空際には、ふはふはとした綿のやうな白い雲が、ぼつかりと暖かい日光を浴びようとして、僅に立騰つたといふ様に、動きもしないで凝然として居ることがある。水に近い濕つた土が、暖かい日光を思ふ一杯に吸うて、其の勢づいた土の微な刺戟を根に感ぜしめるので、田圃の榛の木、地味な薔は、目に立たぬ間に、少しづつ伸びて、ひらくと動き易くなる。其の刺戟から、蛙はまだ蟄居の状態に在りながら、稀には、そつちでもこつちでも、くくと鳴き出す事がある。空から射す日の光は、そろりと熱度を増して、土はそれを幾らでも吸うて止めぬ。土はすべてをだんくと刺



春 とうごく

戦して、堀の邊には蘆やとだし
ばや其の他の草が空と相映じ
て、すつきりと其の首を擡げる。
軟らかさに満たされた空気を
更に鈍くする様に、榛の木の花
はひらくと止まず動きなが
ら、煤のやうな花粉を撒き散ら
してゐる。蛙は假死の状態か
ら離れて、軟らかな草の上に手
を突いては、驚いた様な様子を
して空を仰いで見る。さうし
て、彼等は慌てたやうに聲を放
つて、其の長い睡眠から復活し

たゆたふ
たゆたふ

たことを空に向つて告げる。それで、遠く聞く時は、彼等の騒が
しい聲は只空にのみ響いて快げである。

彼等は、更に、春の到つたことを一切の生物に向つて知らす。

草や木が心づいて其の活力を存分に發揮するのを見ないうち
は、鳴くことを止めまいと力める。田圃の榛の木はとうに花を
捨てて、自分が先に嫩葉の姿になつて見せる。黄色味を含んだ
嫩葉が、さわやかで且朗かな朝日を浴びて、快い光を保ちながら、
蒼い空の下に、まだ猶豫うて居る周囲の林を見る。岬の様な形
に偃うて居る水田を抱へて、周囲の林は、漸く其の本性のまにま
に勝手に白つぼいのや、赤つぼいのや、黄色つぼいのや、種々に茂
つて、それが氣が付いた時に急いで一つの深い緑になるのであ
る。雑木林の其處ら此處らに散在してゐる開墾地の麥も、すつ
と首を出して、蠶豆の花も、可憐な黒い瞳を聚めて羞づかしさう

堪へ絶え

に葉の間からこつそりと四方を覗く。雑木林の間には、又芒アキの硬直な葉が空を刺さうとして立つ。其の麥や芒の下に居を求め、雲雀が時々空を占めて春が闌けたと喚びかける。さうすると、其の同族の聲のみが空間を支配してゐるべき筈だと思つてゐる蛙は、其の囀る聲を壓し去らうとして、互の身體を飛び越え飛び越え鳴き立てるので、小勢な雲雀はすつとおりて、麥や芒の根に潜んでしまふ。さうしては蛙の鳴かぬ日中のみ、之を仰げば眩しさに堪へぬやうに、其の身を遙かに燈トモめく日の光の中に没して、其の小さな喉のちぎれる迄は劇しく鳴らさうとするのである。蛙はいよゝゝ益鳴き矜まじつて、樅の木やうな大きな常磐木の古葉をも、一時にからりと落さねば止むまいとする。此の時、すべての樹木や、それから冬季の間にはぐつたりと地に附いて居たすべての雑草が爪立ちして、只空へゝと暖かな

膨脹

通

光を求めて止まぬ。土がそれを凝然びんぜんとひき留めて放さない。それで一切の草木は土と直角の度を保つてゐる。冬季の間は土と並行することを好んで居た人も、鐵の針が磁石に吸はれる如く、土に直立して各自に手に農具を執る。紺の股引を藁わらで括つて、皆田を耕し始める。水が欲しいと人が思ふ時、蛙は一齊に裂けるかと思ふ程喉の袋を膨脹させて、身を揺がしながら殊更に鳴きたてる。白い絛むす絲いとの様な雨は、水が田に滿つるまでは注いで又注ぐ。鳴くべき時に鳴く爲にのみ生まれて來た蛙は、刈株を引返しゝ働いて居る人々の周圍から足下から逼つて、敏捷に其の手を動かせゝと促して止まぬ。蛙がびたりと聲を呑む時には、日中の暖かさに人もぐつたりとなつて、田圃の短い草にごろりと横になる。さうして蛙は、ひつそりと靜かな夜になると、如何にも自分の聲が遠くかつ遙かに響くかを矜まじるもの

の如く、力を極めて鳴く。雨戸を閉づる時、蛙の聲はめつきり遠く隔たつて、それがぐつたりと疲れた耳をくすぐつて、百姓のすべてを安らかな眠に誘ふのである。熟睡する事によつて、百姓は皆短い時間に、疲勞を恢復する。彼等が雨戸の隙間から射す夜明の白い光に驚いて、布團を蹴つて外に出ると、今更の様に耳に逼る蛙の聲に、其の覺醒を促されて、井戸端の冷たい水に全く朝の元氣を喚び返すのである。草木は遠く遙かに響けと鳴く、其の聲に撼られつゝ、夜の間成長する。櫟や檜や其の他の雑木は、蛙が鳴けば鳴く程、さうして、それが鳴き止む季節までは、幾らでも繁茂することを繼續しようとする。其處には、毛蟲や其の他のあさましい損害が或は有るにしても、しとくと屢梢を打つ雨が、空の蒼さを移したかと思ふやうに、力強い深い緑が地上を掩うて、爽やかな涼しい蔭を作るのである。

(主)

撼

三二 民

謠

島木赤彦

島木赤彦
 本名久保田俊彦、長野縣の人、歌人、大正十五年歿、年五十

日本民族には、太古から日常の感情を歌謠にうつして、自ら口に歌ひ、且又對者と唱和するといふ風があつた。それ等の民謠の中で、或特別な形式を備へたものは、移つて短歌となつて、かの萬葉集時代に於ける大發達をなした。然るに、この萬葉集時代に、緊張の頂點まで達した短歌が、古今集以後の勅撰に至つて、著しく弛緩の情態を現したといふことは、一面奇異な現象のやうに考へられるが、それは決して奇異ではないのである。

古今集以後の和歌といふものは、萬葉集の歌の如く、傳統的に民衆心理から生み出された歌ではない。民衆とかけ離れた一部貴族社會の玩弄物であつて、その出來方も、緊張した感情から生み出されると言ふよりも、外形を整へるに苦心して作り出さ

民衆心理

空疎
萎縮

勅撰集時代

醍醐天皇の時勅して古今和歌集を撰せしめられた時から、後花園天皇の時新編古今集を撰せしめられた時まで、五百三十餘年間をいふ。

神樂歌

神樂に合はせて歌ふ

催馬樂

雅樂の一種

袖こそ破れぬ

れたもので、内面の空疎と萎縮とは、當時の歌人の思はぬところであつた。故に私は、萬葉集の精神は決して勅撰集には傳らずに、かへつて短歌の形を存してゐないその當時の民謡に存してゐると信じてゐる。民衆の心理から生まれた短歌の精神が、民族的歌謡の一分流であるところの民謡に合流してゐることは、決して不自然ではない。

このことは、勅撰集時代の、その背後に存してゐたと思はれる神樂歌や催馬樂歌の中に現れてゐる民謡を調べて見れば、容易にうなづくことが出来るのである。

笛分けば袖こそ破れぬ、利根川の石は踏むともいざ河原より。
しながどり猪名の湊に入る舟の、かぢよくまかせ舟かたぶくな、若草の妹も乗せたり我も乗りたり。

といふやうなのは、ほんの一例に過ぎぬが、この民謡から採つたと思はれる神樂歌や催馬樂歌を以て、古今集以下の勅撰集に比べても、その系統が萬葉集に通じてゐることは明白である。さうしてこの民謡の系統は、足利・徳川の各時代を経て、順次に發達推移して、今日に及んでゐるのである。

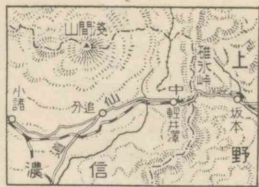
然らば、それ等の民謡と生命となつてゐるのは何であらうか。それはやはり、民衆の苦しい生活が自然に産出したところの、惻惻として人の心を動かす力を持つ情調である。農民の唄ふ歌謡には、のん氣に似て、その底には重々しい調子がこもつてゐるし、船頭唄や馬子唄には、多くは漂泊のやるせない哀音がこもつてゐる。

乳が崎沖まで見送りましょが、それから先は神だのみ。伊豆大島の唄の如き、必ずしも船唄とばかりは言へぬが、海中の孤島に頼

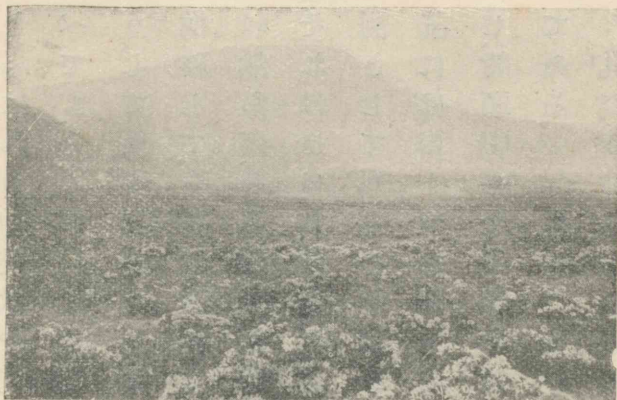
惻々
同情
（五ノミツトモ）

乳が崎
大島の西北端

浅間
長野縣と群馬縣との
國境に跨る活火山、
海拔二五四二米。
追分
長野縣北佐久郡にあ
る町もと中仙道と
善光寺道との分岐點
であつた。



碓氷峠
浅間山の南、群馬縣
碓氷郡と長野縣北佐
久郡の境にある、海
抜約一〇〇〇米。
坂本
群馬縣碓氷郡にある
町、碓氷峠の東麓。
中仙道
東山道を経て江戸か
ら京都へ行く街道。



浅間山 (つづけ原より見たる)

りなく住む人々の心理が「神だのみ」の哀音となつて現れてゐる
純粹さは味はふべきである。

浅間の煙が北へと靡く、今宵泊
らにや雨になる。

一誦して、浅間の山裾から碓氷越
をして、北國街道を往來する馬子の
唄であることがわかるではないか。
浅間の裾野には追分の宿場があり、
碓氷峠の下には坂本の宿驛があつ
て、いづれも中仙道の旅人の一夜の
泊場であつた。その宿引の女が、
旅人を呼びとめて、一宿を勧める心
がこの歌の心である。一夜の宿を勧める、歌謠を、勧められる旅

輕井澤
長野縣北佐久郡東長
倉村、避暑地として
名高い。

嶮坂
脚絆

嫁
人麿

柿本人麿、歌人、持
統・文武の二朝に仕
へた。
貫之
紀貫之、平安朝時代
の歌人、天慶九年(一六
〇六)歿、年六十五。

人や馬子が自ら唄つて、自分の境遇を辛うじて慰めてゐるとこ
ろが、哀れな漂泊の心である。年が年中、馬の鈴を鳴らして、上る
は碓氷の坂、下るは輕井澤追分の曠野である。見上げる空には、
いつも浅間の煙が靡いてゐる。煙は高く南へ靡く。風が北に
なれば日は晴れる。煙が北へ靡けば、あすの日和は雨となる。
「今宵泊らにや雨になる」は、この嶮坂を上下する脚絆草鞋の身に
は、決して戯れの問題ではないのである。

麥ついて夜麥ついてお手にまめが九つ、九つのまめを見れ
ば親里がこひしや。

麥をつくののは農家の新婦である。嫁していくばくならず、家
人の心も知り難く、起臥にいと々落著かぬ心がある。父母の愛
娘として、掌中の玉であつた優しい身も、今は夜麥をついて掌に
出來たまめを眺めて、親里を思ふ痛切さは、恐らく人麿貫之の秀

抒

地方的個性

歌にも優るものがあらう。
 これ等の唄はその生活から唄はれてゐる。その職業や境遇の生む情調が抒べられてゐる。さうして、民謡としての生命も全くその中にあるのである。
 かゝる職業的個性の心理や感情を表す民謡ほど、それがまた地方的の個性を表現してゐると言ひ得る場合が多いやうである。土を離れて人なく、人の個性は少くも土の個性を離れる事は出来ない。その土地の持つ情調が、その土に住む生活から唄はれた民謡に、強い影を投ずることは、誠に自然の現象である。
 「乳が崎沖まで」の唄が島に生まれ、「浅間の煙」の唄が信濃高原に點在する宿驛の間に生まれ、「麥ついて」の唄が伊豆南方の田舎に生まれ、てゐる事を考へ合はせると、民謡と地方との關係を、ほゞ推測することが出来よう。たゞ民謡の優れたものは、それが口う

轉訛

葦
 稻生澤村
 静岡縣賀茂郡下田町の近傍



つしに他の地方に傳り易いから、それが土地なまりを加へて、いづれの唄がいづれの地に發生したかを見分け難いことも少なくない。しかしながら、よし轉訛したとしても、その唄も土と人とを離れては行かれぬから、その轉訛に自ら地方的個性が現れて来る。例へば、「麥ついて」の歌は甲斐の南方では

大麥ついて麥ついて、お手にまめを九つ、九つのまめを見れば、親の在所こひしよ。

と唄つてゐる。伊豆南方の暖地と、自然にその調子と響とを異にしてゐるのが味ははれる。

この苗をとりあげて、どこに棲まらずや、いなごや、きりすゝきすき葦のこやのうらに棲まらずや。

これは、伊豆の南方の稻生澤村の苗取唄である。思ふに、この歌謠は、決して近代のものではない。少くとも平安朝時代か、或

はそれ以前に生まれたものが、その優れた秀でた調子を持つが爲に、南方の邊土に今日まで轉訛しながらも生命を存してゐるのである。歌體が幼くて、哀憐の心が充ち満ちてゐる。この美しい心情を持つた民謠が、今日の日本に残つてゐて、現在農夫の口に歌はれてゐることは、民族の誇とするに足ると思ふ。

「苗を取りあげた後は、いなごよ、お前はどうするのか。刈つたすゝきや、結きあんだ葦の小屋の中に、自分とともに住まないか」といふその心は、なんといふ單純な、同情の籠つた、愛に満ちた心であらう。

自然の中に愛に包まれて、その日の労働をいそしみながらも、一匹の蟲にも親しい心を持つ農夫の生活が、涙ぐましいまでに尊い。「この苗をとりあげて」は、原作は勿論、この稻を刈りあげてであつて、それが苗取歌に轉用されたものと思はれる。この唄

は他の地方にも残つてゐるが、歌の體から考へて、伊豆のものが最も原作の形を保存してゐると想像される。

一の坂越し二の坂越して三の坂越しや強清水（まじしみづ）

これは信濃國の民謠中、出色の一である。草刈馬に乗つて、八ヶ嶽の裾野を上る。一の坂がある、二の坂がある。坂を上るうちに汗が背に流れる。三の坂を越せばそこに清水が湧いてゐる。齒に冷たくしみ入るほどの強清水が湧いてゐるといふ意で、草刈の男女に唄はれる事によつて、この唄の趣が深い。さうして、どこかに高山國らしい調子が現れてゐる。暖地の濕潤に對して、山國は乾燥してゐる。南の明るさは暖かいが、山國の明るさは寒い。それが、これ等民謠の中にも現れてゐるのである。

（赤彦全集第五卷）



八ヶ嶽
長野縣と山梨縣の國境にある山、海拔約二八九九米。

出色 *あまのこゝろ*

二三 千曲川旅情の歌

島崎藤村

小諸なる古城のほとり

小諸なる古城のほとり

雲白く遊子悲しむ。

緑なす藜藿は萌えず

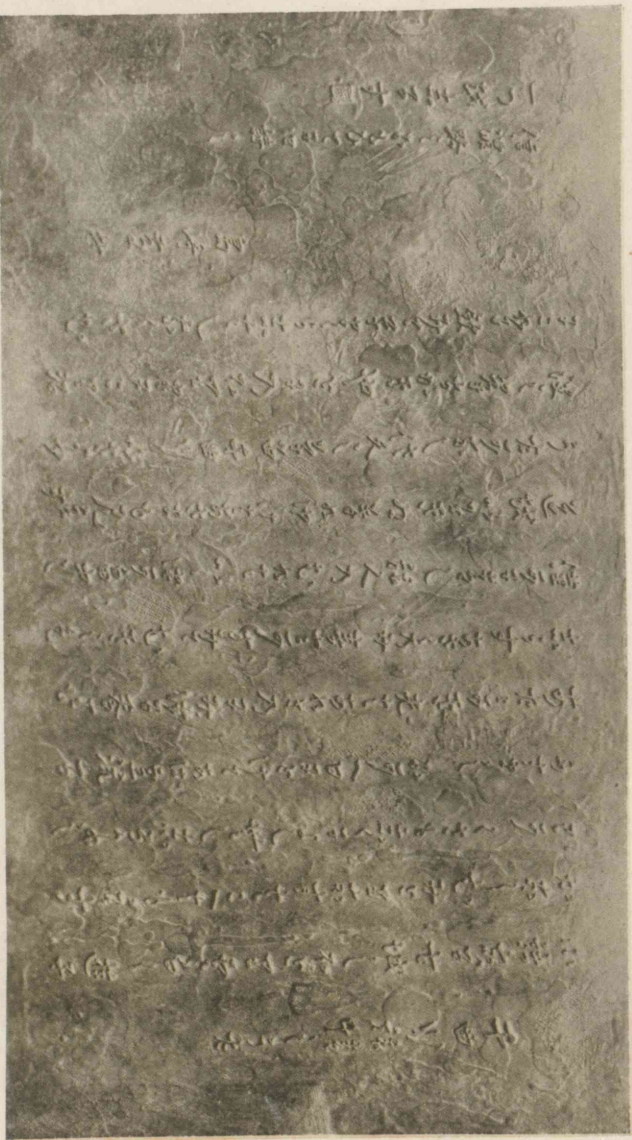
若草も藉くによしなし。

しるがねの衾の岡邊

日に溶けて淡雪流る。

あたゝかき光はあれど

野に満つる香も知らず、



藤村詩碑

藤村詩碑畔より千曲川を望む



浅くのみ春は霞みて
麦の色はつかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ。

わづかに

暮れ行けば浅間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む。

たのしみ
ちやたよ

(落梅集)

千曲川のほとりにて

昨日またかくてありけり、
 今日もまたかくてありなむ。
 この命なにを齷齪あせせこくもて
 明日をのみ思ひわづらふ。

いくたびか榮枯の夢の
 消え残る谷に下りて、
 河波のいさよふ見れば
 砂まじり水巻き返るとく流わつこよ

嗚呼古城なにをか語り、

岸の波なにをか答ふ。
 いにし世を静かに思へ。命
 百年もきのふのごとし。

千曲川柳霞みて
 春浅く水流れたり。
 たゞひとり岩をめぐりて
 この岸に愁うれを繋つなぐ。

(落梅集)

吉江喬松
長野縣の人、明治十三年生、佛文學者、文學博士、早稻田大學教授。

吉凶

二四 自然美の心象
吉江喬松

我々人間に取つての共通環境たる自然と、我々の日常生活とは、普通人々が思つてゐる以上に、密接な關係があるのである。昔の人は、朝鳥の鳴く音に一日の生活の吉凶を卜したといふ事であるが、我々が朝早く鳴く鳥の聲を静かな心持で聴き得る様な時は、その事自身が既に我々にとつて幸福を意味する。なぜならば、その時、我々は自分の生活を確に支配してゐる事を示してゐるからである。我々の生活が取亂れてゐる時には、朝鳴く鳥の聲すら耳にはいらないのである。更に天文を見て人事の變異を察するといふ事も、昔はよく言はれた事である。これも天變地異に際しては、人の心が亂れがちである。常日頃の道德規律では支配されない心理状態に、人

痼癢

攪

心が動搖する事を豫見するのである。

我々は砂塵が風に吹きまくられる中に捲きこまれる時には、不愉快でたまらない。何となく氣がいらくして来る。心が落著かず、痼癢が起つて来る。これも事實である。けれど、その砂塵の舞ひ立つ中にも、一種の力が現れてゐる。一種の美が現れてゐると感ずる人があるとすれば、その人は既にその人の心を攪き亂す自然現象を、自分の心を以て取押へ、支配してゐるのである。

自然美を味はふといふ事は、つまりこの人間に迫り、人間の心を攪き亂す自然現象を、自分の物として支配し、左右し、自由にする事である。若しさうする事が出来ない場合には、人々は常にこの自然現象に壓倒されてゐるのである。朝鳥の鳴く音が楽しく聴かれれば、一日の生活が幸福である

心象

と卜するのは、即ち鳥の鳴く音のうちに美を見出した事であり、その鳥の鳴く音といふ現象を、自分の心の力で支配し、左右した事であり、自分の心の力がいかにも平らかに、穏やかに働いてゐる事を示してゐるのである。但し、我が心の働といふのも、要するに、一種の自然現象である。それ故、外界の自然現象を心の働を以て支配するとは、つまり、我々の心の内外の現象が一致し、調和し、平靜に、和やかになつた姿を指すのであつて、自然美とは、かかる境に浮かび上る心象を呼ぶのである。

この自然美を靜かに確に味はふ事は、つまり、平靜な、確な生活をする事である。いかに美しい空の下に立たうとも、いかに壯麗な山嶺の前に身を置かうとも、若しはつきりした心を持たなければ、その美は心のうちに浮かび上らない。空は灰色であると同じく、山はうるさい鐵の壁となる。

贅澤

けれど、自然美は決して贅澤な心には映じない。奢侈放逸な者の眼に映ずる物は、自然の美ではなく、寧ろ自然への所有欲である。心力の支配ではなく、物質欲の支配である。平靜な心力ではなく、束縛された心の働である。心の平靜統一は、内から外へ向ふと共に、また外から内へ流れる。一莖の草花でも、自然の大きな物の片影であり、暗示である。大空を仰ぎ見る事も出來得ない、人家の密接してゐる窓際に見かける一莖の草花は、大きな緑の平原の力を、人々の心の上に發揮するのである。

自然美の浮かぶのは、美しい景色や、有名な名所に於てではない。それ等を探して歩くにはあたらぬ。我々の身邊日常生活に於て、日の光の中に、吹き過ぐる風の中に、一片の空色の中に求め得られるのである。自然の美は畢竟我々の尊い心象に外ならない。

(自然讀本)

鶴見祐輔
群馬縣の人、明治十
八年生、評論家。
禮讚

二五 大樹禮讚

鶴見祐輔

森の好きな私は、この夏輕井澤の落葉松の森の内に、小さい家
を建てて得意になつてゐた。四方に窓をあけて、どこを眺めて
も、見渡す限りの草と樹、その末は遠山につらなつてゐる。これ
で大いに詩囊が肥えるつもりで、内心頗る満悦してゐると、倫敦
の本屋に頼んでおいたグレイ卿の自叙傳が届いた。それを開
いて挿繪を見た時、まだ駄目だと嗟嘆した。その挿繪といふの
は、銀の樅と題して、グレイ卿が自分の家の庭の大きい樹の下に
立つてゐる寫眞である。鬱々として百二三十尺の高さにおよ
ぶ樅の樹である。その寫眞を見て、私はある莊嚴な感じに打た
れた。千年の風雨に打たれた高い樹が、すつくと青空に聳えて
ゐる姿には、頭の下るやうな聖味がある。子供の時から、かうい

敦

グレイ卿
英國の政治家、西曆
一八四五年歿、年八十一。

聖
味

風
格

テイエヌ
フランスの哲學者、
歴史家、西曆一七九三年
歿、年六十六。

ふ大きい樹の下に生ひ立つたから、グレイ卿にはあのやうな悠
揚迫らざる風格が出来て來たのだ。私はさう思つた。さうし
て微風に揺れる低い落葉松の姿を淋しい心持で眺め渡した。
かういふ樹を毎日見てゐたんでは駄目だと思つた。
聞くところによると、輕井澤にも昔は大きい樹が鬱蒼と茂つ
てゐたのださうだ。これを御維新の時に、この地を過ぎた官軍
が伐り拂つたとのことである。革命は木を伐るといふのは西
洋の名句である。それがこの町にも起つたのだ。テイエヌがオッ
クスフォード大學の巨木を見て、革命が來ても樹を伐り倒さな
いのは、英國人だけだ。」と歎賞した。私は英國に遊ぶごとに、一
樹能く森をなすやうな大きい樅の樹を、汽車の窓から眺めて感
歎する。あゝ、いふ樅の古木を眺めながら、英國人は生ひ立つて
ゐると。

ヘーグ
オランダの首府。
菩提樹



山毛櫨

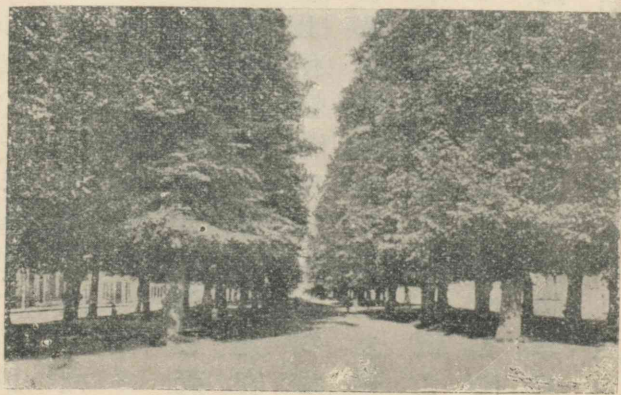


孤壘

新英洲
アメリカ合衆國の大
西洋岸。

天漢

巨木といへば、私はオランダのヘーグ郊外のポッシといふ大森林の菩提樹と山毛櫨の雄姿とを忘れることが出来ない。英國に先立つて議院制度を世界に與へたオランダ、あの歐洲の一角で孤壘に據つて新教と民權とを擁護したオランダだけに、やはり大きい樹を保存し禮讚することを忘れない。パリ一郊外のフォンテンブローの森も壯大だ。米國では新英洲の楡の樹、その蠹々として天漢に迫る楡の老樹を打仰ぎながら、私はよく初代植民人の心意氣を想望した。北京の町では雄大な槐の樹が遊子

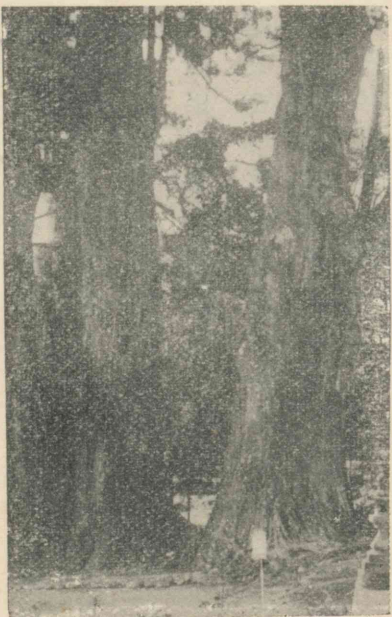


木並樹提菩のトヒレトウ・ダンラオ

晉

得喪

の魂を捉へる。蘇東坡が三槐堂の文中に、王祐が巨樹を庭に植ゑて、子孫に偉人の出ることを待った心持を歌つて、王城の東、晉公の庵いぼりせるところ、鬱々たる三槐、これ徳の符。あゝよいかな。」



杉巨の村杉大

と、いつたのも同じ心であらう。老樹を崇むる心は、人の世の悠久を思慕する心である。限りなく天に向つて伸びゆく巨木の姿には、紛々たる眼前の得喪を忘れしむる威容がある。かゝる大樹を多く保存する國民のみが、千波萬波起伏重疊する治亂興亡の外に立つて、久遠なる生命を保存するのであらう。社會問題といひ、時代思想と

土佐の國
高知縣

いひ、經濟政策といふ、それ等一切の現實問題の根柢には、大地にどつかと根をおろし、大空にすつくと伸び上る大樹の力が無くてはならない。

かゝる大樹禮讚の情操を懷いた私は、つい先頃、土佐の國に遊んで、長岡郡大杉村の山腹に生ふる日本一の巨杉を見た。樹幹二百尺、亭々として雲に入るこの大杉は、二千年の齡を重ねてゐるといふ學者の推定である。そこに日本國民の運命の暗示を見たやうに私は嬉しかつた。そして私は五十鈴川のほとりに立ち並ぶ莊嚴な杉の巨林を思ひ浮かべた。それは色々の意味で日本國民の象徴である。

稻畑勝太郎

文久二年(三五三)生、
實業家、前大阪商工
會議所會頭、貴族院
議員

ヱイン

稱、文那福建省の別
關

暢

安南

佛領印度支那の東部
地方

順化

安南の首府、エエ河
にまたがる、河口か
ら十五軒

乾坤一擲

天地を一手に握る

二六 大和民族發展の跡

稻畑勝太郎

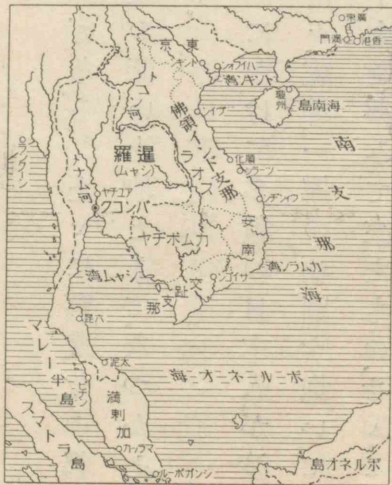
一行はヱインを立つて、暢氣な旅をつゞけながら、安南の都順化府に入つた。

順化はなつかしい舊文化の都である。たゞに舊文化の都であるばかりでなく、日本人に縁故の深い土地として、なつかしい追憶をよみがへらせる都である。

足利時代から徳川時代の初期にかけて、多數の日本人が渡來して、こゝに住んでゐた。雄心落々、乾坤一擲の覇圖を抱いて來たもの、噂に聞く寶の山に一攫千金を夢みて來たもの、せまこましい舊天地の生活に倦んで、新天地の自由に憬れるもの、すべてが燃ゆる希望と、潑刺たる意氣とを滿身に包んで、續々とこの地に渡航したのである。

妃

當時この地に於ける日本人の勢力は素晴らしいもので、中には入つて王妃になつた婦人もあるといふことである。殊に順化の南のハイフーなどは、全然日本人の植民地の觀があつたといふことで、今でも日本橋と呼ぶ橋もあり、日本人の墳墓の残つてゐるものも多い。中にも、塚の具足屋の墓は有名であるが、聞く所によれば、この墓は今度フランス政府の保護記念物に編入されたさうである。だが、もうすべて昔の夢になつて了つた。今では僅か三人の日本人が住んでゐるに過ぎない。みじめさで、當時のわが同胞の覇圖も、雄心も、野望も、すべてが地下に葬り去られて、たゞ冷たい墳墓



(期初の代時川徳) 圖面方南安

塚

が昔の夢を物語るのみである。日暹兩國は古くから交通が開け、既に御朱印船當時に、相當密接な關係があつたのであるが、山田長政のシヤム入りによつて、一層密接の度を加へるに至つた。長政は一の風雲兒であり、ロマチックな英雄である。鬱勃たる覇氣と野心とは、彼をして狭い日本に安住することを屑しとさせなかつた。彼は元和の初年、駿府の船頭に伴れて臺灣に渡り、こゝから支那船に乗込んでシヤムに渡り、アユチャの町に入つた。だが、アユチャに入つた日本人は、長政が最初ではなかつた。

暹 御朱印船
朱印狀によつて外國貿易を許可された船をいふ。
山田長政
通稱は仁左衛門、駿河國(静岡縣)の人。
風雲兒

元和 紀元三七五—三六三
アユチャ
バンコックの北メナム河に臨む。



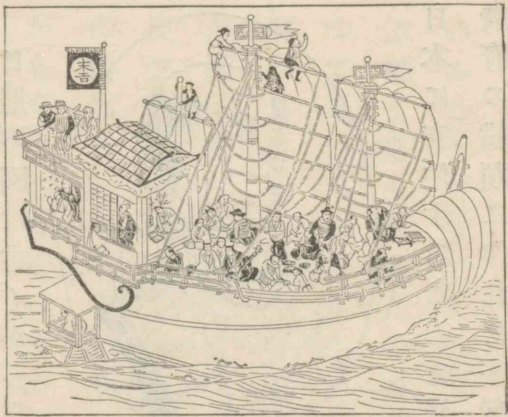
山田長政のシヤム入りによつて、一層密接の度を加へるに至つた。長政は一の風雲兒であり、ロマチックな英雄である。鬱勃たる覇氣と野心とは、彼をして狭い日本に安住することを屑しとさせなかつた。彼は元和の初年、駿府の船頭に伴れて臺灣に渡り、こゝから支那船に乗込んでシヤムに渡り、アユチャの町に入つた。だが、アユチャに入つた日本人は、長政が最初ではなかつた。

日本に安住することを屑しとさせなかつた。彼は元和の初年、駿府の船頭に伴れて臺灣に渡り、こゝから支那船に乗込んでシヤムに渡り、アユチャの町に入つた。だが、アユチャに入つた日本人は、長政が最初ではなかつた。

標悍

世界の寶庫の様に思はれてゐたシヤム・安南には、邦人の敢爲の徒が踵を接して押しかけてゐた。アユチャの町にも、既にこれ等先輩の邦人が來在して、相當幅を利かせてゐたのである。

御 朱 印 船



シヤム王は、これ等邦人の標悍勇武を愛して、アユチャの城下に地を與へて住ましめた。長政の渡つた時には、既に七百人の邦人が居住してゐたといふことである。勇武にして膽略に富んだ長政は、次第に日本人間に認められ、終に衆望を鍾めるやうになつた。今で云へば、居留民團長の格である。そこで彼は、邦人を集めて兵を談じ武を練り、聲威アユチャの町

邀撃

阻喪

を壓した。

その後國王に知られて、次第に信任を得たが、たま／＼六昆の大軍が大舉してシヤムに來寇した。國王は長政を召して彼に託するに六昆軍邀撃の大任を以てした。虎視眈々、機會を覘つてゐた風雲兒長政は、我が事成れりと勇躍した。彼は平素から訓練して置いた部下の日本人三百を中堅とし、これにシヤム兵二千に日本の甲冑を著けさせて、威容堂々として打つて出た。かねて日本人の勇武に見怖ぢ聞き怖ぢしてゐた六昆軍は、先づ氣を吞まれて、士氣大いに阻喪した。この機に乗じて、彼は木曾義仲の故智を學んで、野牛や大象を放つて敵兵を蹂躪させた。彼の奇略はうまく圖に當つて、手もなく六昆の大軍を撃退することが出來たのである。

國王は喜んでこの凱旋將軍を迎へ、彼の勳功を重賞して次い

て六昆王に封じた。言はば食ひ詰め者の一浪人である彼は、ここに至つて、小さいながら一國の王位に上ることを得て、日本人のために大いに氣を吐いたのであつた。

その後の彼の威勢は旭日昇天の如く、國王の信賴日に厚く、大帥太傳の榮位に上り、終にはシヤムの副王にまでなつた。彼の勢力の加るにつれて、アユチャに於ける日本人の勢力も大いに振ひ、邦人の來り住むもの八千人の多きに達した。これがシヤムに於ける日本人居住の最高レコードである。ところが、不幸にも國王の病死に次いで、宮中に忌まはしい勢力争が起り、或大官が、かねて剛直を以て知られた長政を眼の上の瘤として、甘言を以て彼を宮中に誘ひ、つひに毒殺したと言ひ傳へられてゐる。英雄の末路憐むべしといふが、彼もまたその例に漏れず、こゝに哀れを異域に留めることになり、落々たる雄

心も、覇圖も、あたら一炊の夢と消え去つたのである。彼のロマンチックな一生は、そのまゝ一篇の劇であり、詩である。彼も亦偉大なる天才兒であると云つてよい。

彼の凋落は、アユチャの日本人にとつて、大なる打撃であつた。既に大黒柱を失つた家屋は、倒壊するより外はない。アユチャに於ける日本人の勢力は、恰も沈み行く夕日の如く、日増しに衰頽して、退去逃亡踵を接し、終に印度支那のツローン邊へまで没落するの餘儀なきに至つた。この悲しむべき出來事は、日本民族のシヤム發展に、致命的の打撃を與へて、爾來日暹兩國の交渉は殆ど杜絶するに至つたのである。現在日本人のシヤムに在るもの、僅に三百人に過ぎないと聞いては、うたゝ今昔の感に堪へないものがある。

當時のわが鎖國方針は、大和民族の覇氣を抑へ意氣を阻喪さ

踴躍

萎靡

せて、あたたら海外發展の出鼻を挫いてしまつた。かくて野心勃
 勃たる武士と、敢爲な商民をして、猫の額のやうな小天地に踴躍
 することを餘儀なくさせ、終には大和民族本來の積極進取の氣
 象までも萎靡させたのである。當時の爲政者が、今少し達識で
 あつたなら、長い間日本が西洋文化の後塵を追ふに汲々たる不
 利もなかつたであらうし、當分人口問題を頭痛に病む必要もな
 かつたであらう。思へば残念だが、今となつては後の祭である。
 それよりも、今の日本人、わけても青年達の、覺醒と奮起とを望ま
 ねばならぬ。私は敢て日本の青年達に警告したい。

「覺めよ、有爲のわが青年よ。そしてもつと眼を大きく見開く
 がよい。坤輿球上^{コンヨ}到るところ、卿等の新しい世界が待つてゐる
 ではないか。」と。

(歐亞に使して)

二七 明治維新の精神

中村 孝也

明治維新は國史における空前の大革新であります。この機
 會において國民生活は一大展開を遂げました。これを考察す
 るのには、風俗の方面からも、經濟の方面からも、政治の方面から
 も、思想の方面からも、これをなすことが出來ますけれども、こゝ
 では暫く思想即ち精神的方面に立つて一言批判を試みたいと思
 ふのであります。

明治維新の大精神の中心たるものは、創造的精神であります。
 しかしながら、それに對し先行的に働いたものは、復古的精神で
 ありました。この二つの力が相合して、よく現状打破新生活展
 開の成績を挙げ得たのであります。故にまづ復古思想の方面
 を眺め、次いで創造的精神の方に移らうと思ふのであります。

中村孝也
 群馬縣の人、明治十
 八年生、歴史家、文
 學博士、東京帝國大
 學史料編纂官

批判

伊藤仁齋

名は維楨、江戸時代中期の儒者、寛永二年(三三)歿、年七十九。

荻生徂徠

名は雙松、江戸時代中期の儒者、享保十三年(二六)歿、年六十三。

説

復古思想は江戸時代における思想界を貫いて存する盛んな大潮流でありました。試みに儒教に就いてこれを見ますならば、朱子學派・陽明學派の如き外來の學派に對して、伊藤仁齋・荻生徂徠の古學派が起つて、宋・明を超越して直ちに孔・孟の古に復歸しようとして致しました。國學に就いて見ますならば、これは中世上代文學を振返つて見るものであります。神道に至りましては更に古代外來思想の影響を受けなかつた時の國民信仰を回顧するものであります。歴史もまた主として古代史を研究したのであつて、同じく復古思想の表現であります。この復古思想が政治の方面に現れて、武家の方では徳川氏の始祖たる家康を規準に立て、八代將軍吉宗はその享保の改革に當つて、萬事權現様御説の通り。」といふ言葉を套語として、直ちに慶長・元和の古へに復することを努めました。次いで寛政の松平定信は、近

水野忠邦

江戸時代後期の政治家、將軍家齊・家慶に仕へて老中となつた。嘉永四年(三二)歿、年五十九。

くしては祖父吉宗の享保時代、遠くしてはまた東照大権現の時代に復せんことを努めたのであります。降つて天保の改革者水野越前守忠邦は、近くしては寛政の定信、溯つてはせめて享保の將軍吉宗にまで復しようとして努めたのであります。翻つて朝廷の側でこれを見ますと、王政復古運動の戦線に立つて、皇室中心の新しい時代を打開かうと努めたところの人々は、近く建武中興の政治を標準としたのであります。建武中興は後醍醐天皇によつて成された改革であります。その理想の標準として仰ぎ見たのは、平安朝の盛時たる宇多醍醐村上の三帝の時代でありました。大覺寺統の御歴代には後宇多天皇、後醍醐天皇、後村上天皇が相繼いで立たせられてをりますので、その御追號を通してすらも平安朝の盛時にあこがれてをられたことが思はれるのであります。

然るに、その王朝の盛時の淵源は、なほ溯つて、神武天皇の建國の創業に存するのであります。こゝにおいて明治維新の復古思想は、近く建武中興に止まることなく、更に平安朝の盛時を経て、溯つて遠く神武天皇建國創業の古へに復せんとするやうになりました。これ實に復古思想の最も雄大なるものであります。然るに神武天皇建國創業の時代においては、いまだキリスト教の傳來なく、また佛教の傳來なく、更に儒教の傳來すらもなく、即ち一切の外國文化、外來思想の影響を蒙ることなく、喩へば生まれ落ちたまゝの純眞な姿でありまして、そこに最も正しい日本精神が存在したのであります。この日本精神がその後幾多の外來文化に養はれ、育てられて、複雑な生活内容をもつに至つたのであります。が、今や神武天皇建國創業の精神を發揮することを目標とするに至つたのは、要するに純粹な日本精神

を發揚せんとすることに外ならないのであります。

然らば、その日本精神の中心核子たる力は何であるかと申しますと、一言にして盡くせば、それは祖神崇敬の信仰であります。祖神崇敬を分解致しますと、崇祖と敬神とになります。崇祖は祖先崇拜であり、敬神は神祇崇拜であります。我々が自己の生命を考へる時に、肉體の淵源を祖先の血統に求め、心靈の淵源を神の信仰に求める事は人類共通の現象であり、珍らしいとするに足らないことであります。この二つが合體して、あらゆる祖先は悉く神であり、あらゆる神は悉く祖先であるといふ信仰をもつのは、日本國民固有の事實でありまして、數千年來連綿として今日に至り、なほ且我々の胸中に澎湃として溢れ漲つてゐるところのものであります。故にこの中心觀念を振返つて見たところの明治維新の根本の力は、祖神崇敬の信仰を確立するに

澎湃

あつたと考へるのであります。しかしながら、この復古思想は、明治維新の大革新の主たる部分ではなくして、實はこれを基礎として、將來に向つて新たな生活様式を建設することの方が重要な部分を占めたのであります。いひ換へてみますと、復古思想は回顧的であります。が、たゞ徒らに過去を振返つて見る目的をもつて振返つたのではなく、實は將來に向つて正しく進まんがためにまづ振返つて見たのであります。凡そ正しく進まんを欲するものは、まづ正しく顧みることゝを要します。過去より現在にわたつて進んで來た大道といふものは、將來またこれによつて進むべきものであつて、こゝに新たな生活様式を建設せんとする創造精神が働いて來るのであります。こゝにおいて武家階級本位の生活は破壊されて、國民全體の生活を創造する力が動いて、三つの方面に現れて來ま

經濟組織

した。

第一、經濟方面では資本の價值が自由に伸びて、資本經濟組織を完成し、從來の土地經濟組織に代ることになりました。

第二、思想の方面では皇室中心の國民生活をもつて、最も正しく、また最も健全なものとする思想が全國民を通じて尊重せられ、永い武家時代を通じて存してをつた、皇室の外に別に幕府を中心とする不徹底な誤れる思想が打破されました。

第三、政治の方面では、内にしては皇室中心の立憲政體が確立し、外にしては國力が伸長し、領土は擴大せられ、國際的地位は高まり、國威は全世界に發揚せられました。

かくの如くして、經濟と、思想と、政治と三方面が變化したことは、即ち社會生活の全部が變化したことになるのであります。こゝにおいて前進的、躍進的の氣分が滿ち溢れて參りました。

國際的地位

朝 暎
嚙 曉

夜は明けました。朝暎は爽やかに美しく東の空に昇りました。進軍喇叭の聲は嚙曉として野にも山にも勇ましく反響し、新時代は朗かに展開して参りました。

明治元年三月十四日、明治大帝は五箇條の御誓文を宣せられ給ひ、そして「智識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ」と仰せ下されました。その御指揮に随つて我々日本國民は舊來の陋習を破り、天地の公道に基づき知識を世界に求め、大いに皇基を振起し奉り、上下心を一にし、盛んに經綸を行ひました。その結果、僅に六十餘年にして、狭かつた領土は廣くなり、少かつた人口は多くなり、弱かつた國力は強くなり、低かつた國際的地位は高くなり、今や日輪の中天に輝く如く、日本國家の存在は、全世界の人類の仰ぎ見るところとなりました。

しかしながら、靜かに己を顧みる時、我々が四方の門戸を開い

經 綸

て求め得たところの文化は、果していかなる價值を有するものでありましたらうか。我々は今日明治神宮の御前に平伏して、明治大帝の御神靈に對し奉り、及ばずながら御思召を奉じて、まさに知識を世界に求めました」と、御報告申し上げることは出來ます。けれどもその求め得た知識が、果してすべて明治維新の大精神に適するものなりや否や、この點に就いて今日深く顧みる必要があるのであります。

(日本文化史要)

訂五新日本讀本卷六 (終)

常用漢字

(大正十二年五月臨時國語調查會發表、昭和六年五月修正) (千八百五十八字)

〔一〕一丁七丈三上下不
 世丙並〔一〕中〔、〕丸主
 〔了〕之久乏乘〔乙〕乙九
 乞也乳亂〔了〕了事〔二〕
 二五五井〔亡〕亡交京亭
 亦〔人〕人仁仇今介仕他
 付代令以仰仲伴任伊伏
 伐休伯伴伺似位低住佐
 何余佛作伸使來佳例侍
 供依侮侯侵便係促俱俊
 俗保俠信修俳俵倅併倉
 個倍倒候借倫假偉偏倂
 健側偶傍傑備催働傳債
 傷傾儻像僚僞僧價儀億

儉償優〔元〕元兄充兆兇
 先光克免免兒〔入〕入內
 全兩〔八〕八公六共兵具
 其典兼〔冊〕冊再〔元〕元
 〔冷〕冷涼准凌凍〔凡〕凡
 凡〔凶〕凶出〔刀〕刀刃分
 切刊刑列初判別利到制
 刷劊刺刻則削前剛副剩
 割劊劊劊劊〔力〕力功加
 劣助努劬勅勇勉勸勸務
 勝勞募勢勤勳勸勸〔區〕區
 包〔七〕化北〔區〕區〔十〕十
 十千升午半卑卒卓協南
 博〔卜〕占〔印〕印危却卵

卷即〔厄〕厄厘厚原厥
 〔去〕去參〔友〕友及友反叔
 取受〔口〕口古句叫召可
 史右司各合吉同名后吏
 吐向君吟否含呈吸吹告
 咸周味呼命和咽哀品員
 哲唐唯唱商問啓善喉喜
 喪喫單嗣嘉器噴嚴囑
 〔囚〕囚四回因困固國圍
 園圓圖團〔土〕土在地坂
 均坊坑坪垂型埋城域執
 培基堀堂堅堤堪報場塔
 塗塵境墓塀增墜墮壁壇
 壓壤〔士〕士壯壹壽〔又〕又

夏〔夕〕夕外多夜夢〔大〕大
 大天太夫央失奇奉奏契
 奔奢與奪獎奮〔女〕女奴
 好如妃妊妥妙妨妹妻姉
 始姑姓委姦姪姪姬姻姿威
 娘娘娠娼婦婦婚媒嫁嫡
 嫌孃〔子〕子字存孝季孤
 孫學〔宅〕宅守安宏完宗
 官定宜客宜室宮害宴家
 容宿寄密富寒察寢實審
 寫寬寶〔寸〕寸寺封射將
 專尉尊尋對導〔小〕小少
 尙〔尤〕就〔尺〕尺尼尾尿
 局居屈屈屋展層履屬

【山】山岡岩岳岸峙峯島
峽崇崎崩【川】川州巡巢
【工】工左巧巨差【已】已
【巾】市布帆希帝帥師席
帳帶常帽幅幕幣【干】干
平年幸幹【幻】幼幾【床】
床序底店府度座庫庭庶
康廉靡廢廣廳【延】延廷
建廻【弄】弄弊【弋】弋式
【弓】弓弔引弟弱張強彈
【影】形彩彫影彰【役】役
彼往征待律後徐徑徒得
從御復徵微德微【心】心
必忌忍志忘忙忠快念怒
思急急性怨怪怯恐恥恨
恩恭息悔悟悖患悲惟悼

情惑借惠惡情惱想愁愉
意愚愛感慈態慕憐悞慎
慣慨慮慰慶慾憂憐憚恚
憶憾憤懇應懲懷隱戀
【戔】戔戎戰戲戴【戶】戶
戶戾房所扇【手】手才打
披扶批承技抑投抗折抱
抵押披抽拂拍拒拓拔拘
拙招拜括拳拾持指振捕
捧描拾掃授掌排掛探探
控推揚接提換握揮搥搥
援損搖搜摘携摩撫擇擊
操擔據擬擴攝【支】支
【支】收改攻放政故敎
敏救敗敢散敬敵敷敷敷
【文】文【斗】斗料斜【斤】斤

斤斤斬新斷斯【方】方施
旋族族旗【无】既【日】日
且旨早旬旭昇昌明易昔
星春昭昨是映時晚晝普
景晴晶智暇暖暗暑暮暴
曆曇曜【日】曲更書曹會
替最會【月】月有朋服朕
朗望朝期【木】木未末本
札朱机朽杉材材束柿杯
東松板枕林枚果枝枯架
柄某染柔查柅柱柳栗校
株根格栽桃案桐桑梅條
梨械棄棋棒棟森棺植楠
業極榮構概樂樓標樞榭
樣樹橋機橫檄檢櫻欄權
【欠】欠欲款欺歌歎歐歎

【止】止正此步武歲歷歸
【歹】歹死殊殉殖殘【段】段
殺殿毀【母】母每毒【比】
比【毛】毛【氏】氏民【气】
氣【水】水水永汁求汗汚
江池決汽沈沒沖沙汰河
沸油治沼沿沉泉泊法波
泣泥注泰泳洋洗津洪活
派流浦浪浮浴海浸消涉
添減淵渡溫測港渴湖湧
湯源準溢溶溺滅滋滑滯
滴滿漁漂漆漏演漕濃濕
漫漸潔潛湖澤激濁濃濕
濟濱瀧灣【火】火灰災炊
炎炭烈無然煉煮煙照煩

熟熱燃燈燒營爆爐【爪】爪
爪爭爲爵【父】父【爻】爾
【片】片版牌【牙】牙【牛】牛
牛牧物牲特犧【犬】犬犬狂
狀狂狩狹猛貓猶獄獨獲
獵獸獻【玄】玄率【玉】玉
王玩珍珠班現球理琴環
璽【瓦】瓦瓶【甘】甘
甚【生】生產甥【用】用
【田】田由甲申男町界畏
畑畜畝略番畫異雷當疊
【疋】疋疎疑【疋】疫疫疾
病症痘痛痢療癖【八】登
發【白】白百的皆皇【皮】皮
皮【皿】皿盆益盛盜盟盡
盪盪【目】目盲直相省眉

看眞眠眼着睡督【矢】矢
知短【石】石砂砲破研硬
硯碁碎碑確磁磨礎【示】示
示社祈祀祖祝神票祭禁
禍福禦禮【禾】秀私秋科
秒租秩移稅程推種稱稻
稿穀積穗穩【穴】穴究空
突窃窺窗窮【立】立章童
端競【竹】竹竿笑笛符第
筆等筋筒答策算管箱節
範築篤簡簿籍【米】米粉
粒粘粗粹精糖糞【糸】糸
紀約紅紋納純紙級紛素
紡索紫累細紳紹紺絲組
結絕絡給統絲絹經綠維
綱網綴綻綿緊緒線綿絲

編緩緯練縛縣縫縮縱總
績繁織繕繪繭繰繼續
【缶】缺【罽】罽置署罰罵
罷羅【羊】羊美羣義【羽】
羽翁翌習翼【老】老考者
【而】耐【耒】耒耕【耳】耳聖
聞聯聲職聽【聿】聿肇
【肉】肉肖肝股肥肩育肺
胃背胎胞胸胸能脅脈脊
脚脫腐腕腦腰腸腹膚膜
膝膾臆膺臍【臣】臣臥臨
【自】自臭【至】至致臺
【自】與興舉舊【舌】舌舍
【舟】舞【舟】舟航般舵舫
船艦【良】良【色】色【艸】
芝花芽芳苑苗若苦英茂

茶草荒荷莊菊菌菓菜華
萬落葉著菲蒙蒸著蕞薄
藏藝藤藥【虺】虺虺處虛
號【虫】蚊蛇蛙蜂蜜融蟲
蠶蠶【血】血衆【行】行術
街衝術術【衣】衣表袞袋
袖被裁裂裏裕補裝裸製
複袞襲【西】西要覆【見】
見規視親覺覽觀【角】角
解觸【言】言訂計討訓託
記詠訪設許訴診詐詔評
詞詠試詩詰話詳誇誌認
誓誕誘語誡誤說課調談
請論諭諸詰謀謁諮講謝
諳謹謬證識譜警譯議護
譽讀變讓【谷】谷【豆】豆

豐【豕】豚象豪豫【貝】貝
 貞負財貧貨販貫責貯貳
 貴買貸費賀賀賄賄賄賄
 賚賜賞賢賈賤賦賦賈賴購
 贈贊【赤】赤【走】走赴起
 超越趣【足】足距跡路踊
 躍【身】身【車】車軌軍軒
 軟軸較載輕輦輪輯輪輿
 轉【辛】辛辨辭辯【辰】辰
 農【走】込迎近返迫迭述
 迷追退送逃逆透逐途通

連造連週進逸遂遇遊運
 過道達達遙遞遠遣適遭
 遲選選遺避還邊邊【邑】
 邦邗邗邗邗邗邗邗邗邗邗
 【酉】酌配酒酢酬醕醕醉
 醜醫【采】釋【里】里重野
 量【金】金釜針鈞鈍鈴鉛
 鉢銀鉢銅銘銳鋒鋼錯錄
 錢鍋鎖鎖鏡鏡鐘鐵鐵鑑鏡
 【長】長【門】門閉閉閉閉
 開開關【鳥】防附降限陞

院陣除陪陳陰陵陶陷陸
 陽陸陸階階陸陸陸陸陸陸
 險隱【隹】隹雀雄雅集雁
 雌雙雜離離【雨】雨雪雲
 零雷電雷震霜霧露靈
 【青】青靜【非】非【面】面
 【革】革靴【音】音響【貝】
 頂項順頓預預預預預預預
 類類類類類類類類類類類
 【飛】飛翻【食】食飢飲飯
 節養餓餘餅館餐【首】首

【香】香【馬】馬馳駁馱駐
 騎騰騷驅驗驚驛【骨】骨
 髓髓髓髓髓髓髓髓髓髓髓
 闕【鬼】鬼魂魔【魚】魚鮮
 鯉鯛【鳥】鳥鳩鳴鶴鷄
 【齒】齒【鹿】鹿躍【麥】麥
 【麻】麻【黃】黃【黑】黑獸
 點黨【鼓】鼓【鼻】鼻【齊】
 齋【齒】齒齡【龍】龍【龜】
 龜

注意

(一) 本表にない漢字は假名で書くこと (二) 固有名詞には本表にない文字を用ひても差支ない、た
 だし外國(支那を除く)の人名地名は假名書とすること (三) 代名詞、副詞、接續詞、感動詞、助動詞
 および助詞はなるべく假名で書くこと (四) 外來語は假名で書くこと。

略字表

(臨時國語調査會發表)

左の字體を本位として用ひること。
 (括弧内の小字は字典體)

勸(勸) 權(權) 灌(灌) 飲(飲) 觀(觀)
 沢(澤) 扱(擇) 訳(譯) 馱(驛) 釈(釋)
 変(變) 恋(戀) 蛭(蠻) 灣(灣)
 莖(莖) 徑(徑) 經(經) 輕(輕)
 併(併) 塀(塀) 瓶(瓶) 餅(餅) 研(研)
 齊(齊) 齋(齋) 濟(濟) 劑(劑)
 殘(殘) 淺(淺) 賤(賤) 錢(錢)
 勞(勞) 營(營) 榮(榮) 學(學) 覺(覺)

举(舉) 譽(譽) 斷(斷) 繼(繼)
 齒(齒) 齡(齡) 濕(濕) 頭(頭)
 窓(窓) 総(總) 属(屬) 囁(囁)
 為(爲) 偽(偽) 帶(帶) 滯(滯)
 參(參) 慘(慘) 兩(兩) 滿(滿)
 発(發) 廢(廢) 胤(胤) 獵(獵)
 乱(亂) 辭(辭) 潜(潛) 贊(贊)
 走(走) 徒(徒) 位(從) 縱(縱)
 惱(惱) 腦(腦) 処(處) 扱(據)
 担(擔) 胆(膽) 耒(來) 麥(麥)
 寿(壽) 鑄(鑄) 数(數) 樓(樓)

乐(樂)	葉(葉)	樂(樂)	竜(龍)	滝(瀧)	隨(隨)	隨(隨)	隨(隨)	隨(隨)	隨(隨)	讀(讀)	統(統)	續(續)
虚(虛)	戲(戲)	戲(戲)	廉(廉)	麗(麗)	聽(聽)	聽(聽)	聽(聽)	聽(聽)	聽(聽)	遲(遲)	解(解)	解(解)
独(獨)	觸(觸)	觸(觸)	虫(蟲)	蚕(蠶)	疊(疊)	撰(撰)	撰(撰)	撰(撰)	撰(撰)	飯(假)	兒(兒)	兒(兒)
励(勵)	嘗(嘗)	嘗(嘗)	冂(冂)	囟(圖)	壹(壹)	實(實)	實(實)	實(實)	實(實)	写(寫)	宝(寶)	寶(寶)
条(條)	樣(樣)	樣(樣)	条(條)	樣(樣)	扣(控)	叙(敘)	敘(敘)	敘(敘)	敘(敘)	帛(歸)	气(氣)	氣(氣)
炉(爐)	犧(犧)	犧(犧)	献(獻)	画(畫)	画(畫)	画(畫)	画(畫)	画(畫)	画(畫)	画(畫)	画(畫)	画(畫)

略字表 終

苗(畱)	尽(盡)	禮(禮)	称(稱)
糸(絲)	欠(缺)	声(聲)	台(臺)
旧(舊)	万(萬)	号(號)	証(證)
豊(豐)	弁(辯)	遁(遞)	辺(邊)
医(醫)	鉄(鐵)	関(關)	双(雙)
靈(靈)	余(餘)	館(館)	体(體)
塩(鹽)	点(點)	覚(覺)	覚(覺)
鬪(鬪)	刺(刻)	亀(龜)	龜(龜)

文語動詞活用表

活用種類	語根	活用形			
		未然	連用	終止	連體
四段	書	カ	キ	ク	ケ
上二段	起	キ	キ	ク	ケ
上一段	(著)	キ	キ	ク	ケ
下二段	兼	ネ	ネ	ク	ケ
下一段	(蹴)	ケ	ケ	ク	ケ
カ行變格	(來)	コ	キ	ク	ケ
ナ行變格	(爲)	ナ	ニ	ク	ケ
ラ行變格	有	ラ	リ	ク	ケ

口語動詞活用表

活用種類	語根	活用形			
		未然	連用	終止	連體
四段	書	カ	キ	ク	ケ
上二段	有	ラ	リ	ク	ケ
上一段	起	キ	キ	ク	ケ
下二段	兼	ネ	ネ	ク	ケ
下一段	(著)	キ	キ	ク	ケ
カ行變格	(來)	コ	キ	ク	ケ
ナ行變格	(爲)	ナ	ニ	ク	ケ
ラ行變格	有	ラ	リ	ク	ケ

文語形容詞活用表

活用種類	語根	活用形	
		未然	連用
清	清	ク	ク
涼	涼	シ	シ

口語形容詞活用表

活用種類	語根	活用形	
		未然	連用
清	清	ク	ク
涼	涼	シ	シ

文語助動詞活用表

助動詞種類	語	活用形											
		未然	連用	終止	連體	已然	命令	ラ行變格活用					
受能敬	らる	れ	れ	る	る	れ	れ	ら	ら	り	り	り	り
使役	さす	せ	せ	す	す	せ	せ	さ	さ	し	し	し	し
敬	むす	め	め	む	む	め	め	む	む	む	む	む	む
時	たけ	た	た	ぬ	ぬ	た	た	た	た	た	た	た	た
指	たけ	た	た	ぬ	ぬ	た	た	た	た	た	た	た	た
否定	な	ら	ら	り	り	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら
推量	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ
比況	ごと	く	く	し	し	く	く	く	く	く	く	く	く
希望	た	ず	ず	ぬ	ぬ	た	た	た	た	た	た	た	た
否定	ず	ず	ず	ぬ	ぬ	ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず
時	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む	む
推量	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら

口語助動詞活用表

助動詞種類	語	活用形											
		未然	連用	終止	連體	假定	命令	ラ行變格活用					
受能敬	れる	れ	れ	る	る	れ	れ	ら	ら	り	り	り	り
使役	させる	せ	せ	す	す	せ	せ	さ	さ	し	し	し	し
敬	むす	め	め	む	む	め	め	む	む	む	む	む	む
時	た	た	た	ぬ	ぬ	た	た	た	た	た	た	た	た
指	た	た	た	ぬ	ぬ	た	た	た	た	た	た	た	た
否定	な	ら	ら	り	り	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら	ら
推量	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ	べ
比況	ごと	く	く	し	し	く	く	く	く	く	く	く	く
希望	た	だ	だ	ぬ	ぬ	た	た	た	た	た	た	た	た
否定	ず	だ	だ	ぬ	ぬ	ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず	ず
時	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま
推量	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま	ま

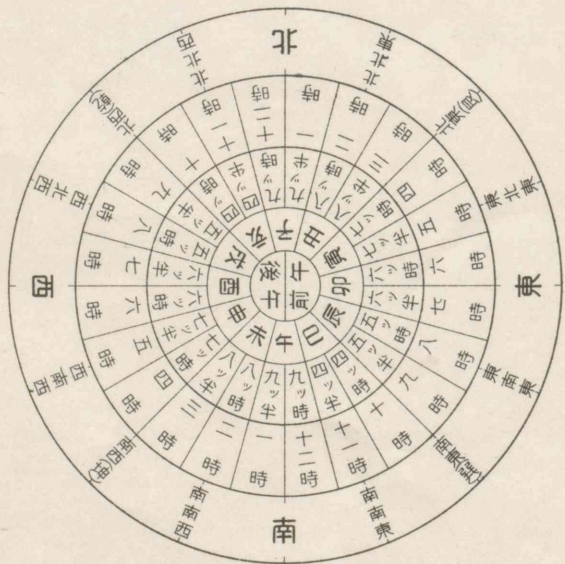
動詞 形容詞

動詞	形容詞
一い音便 二う音便 三撥音便 四促音便	一白き花 二甘くなる 三重くすん
書き 防ぎ 死 飛 積 立 買 破	
て て て て て て て て	
い う ん つ	

他	官	方	地	察 警・官 武							八	太	神	官
職	國	大	右左	檢	右左	右左	右左	右左	彈		政	祇	官	
人	司	幸	京	非	馬	兵	衛	衛	正	省	官	官	等	
所	府	府	職	違	察	衛	門	門	臺			伯	長	
頭	守	帥	大	別	頭	同	督	大	尹	卿	內左太 大右大 區區區	官	官	
五	介	小大	亮	佐	助	同	佐	小中	小大	小大	參中大 納納 議言	小大	次	
六	小大	小大	進	小大	小大	同	將	將	小大	小大	少中 納中 辨言	小大	判	
位	小大	小大	監	附	允	同	附	監	忠	丞	小大	小大	官	
目	小大	小大	屬	志	屬	同	將	曹	疏	錄	小大	小大	主	
	目	典		志	屬	同	志	曹	疏	錄	小大	小大	典	
											史	史		

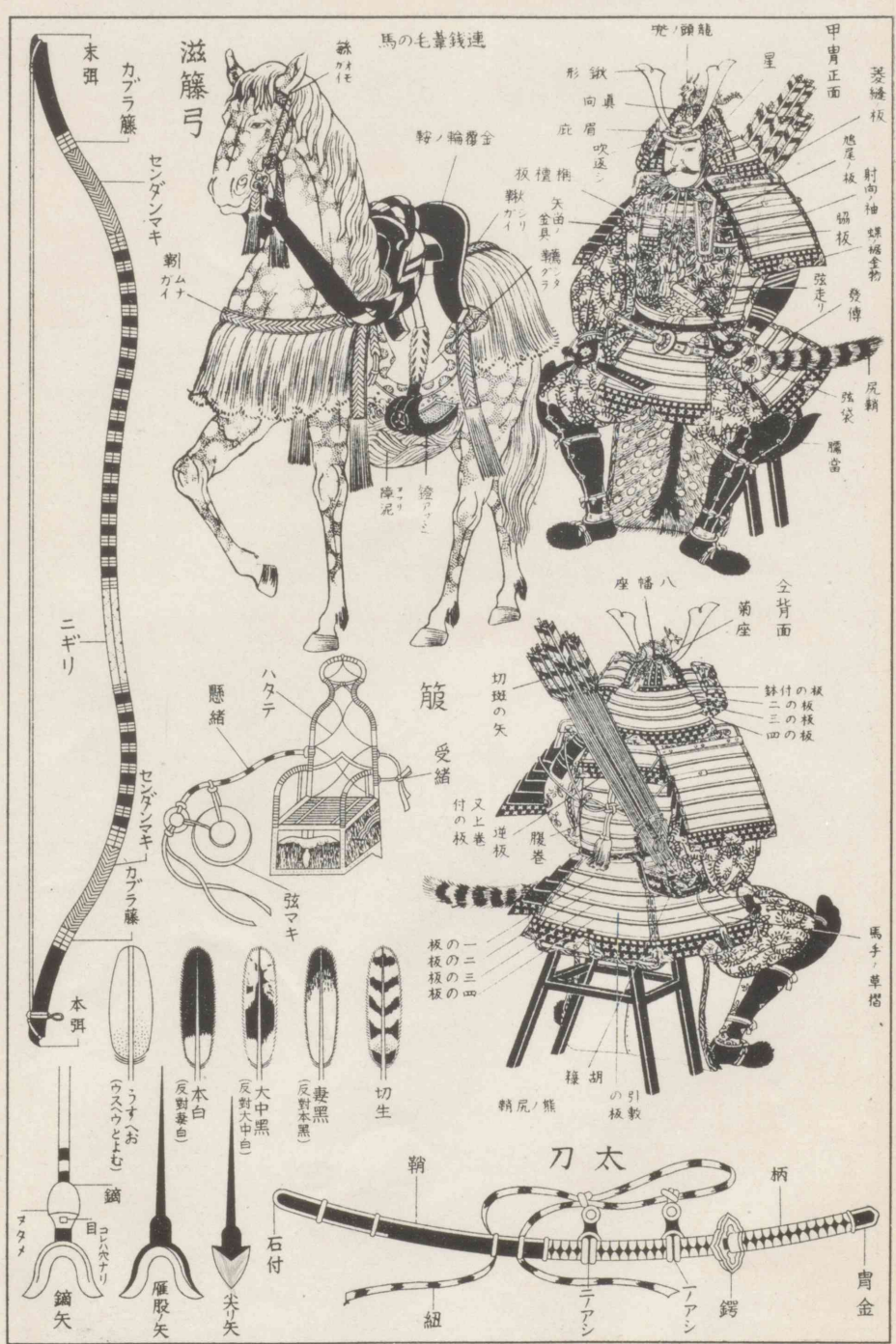
官職表 (大寶令を基本としたもの)

圖の時及び方位



官職表 (大寶令を基本としたもの)

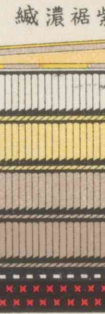
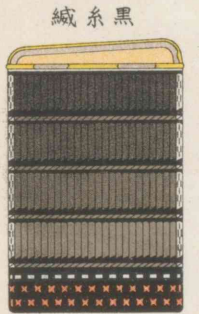
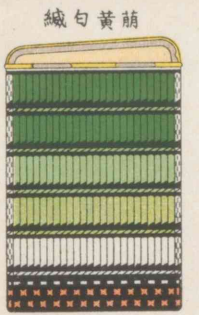
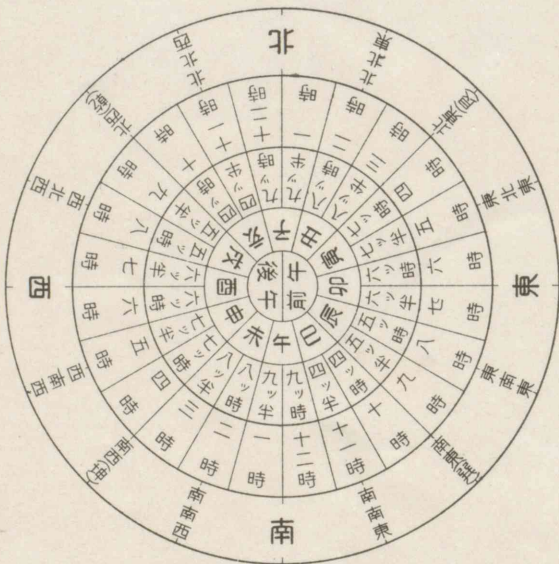
八	太	神	官	官	
省	政	祇	職	等	
卿	官	官	長	官	
大	内	大	次	官	
輔	中	納	判	官	
丞	大	納	主	典	
録	小	小	史		
	小	大	史		



官職	地方官		警衛官				武官		八省	太政官	神祇官	官職
	大宰府	右京	左京	右衛門府	左衛門府	近衛府	右近衛府	左近衛府				
藏人	大宰府	右京	左京	右衛門府	左衛門府	近衛府	右近衛府	左近衛府	彈正臺	内左大臣	右大臣	長官
頭	大宰府	別當	別當	同	同	大將	大將	大將	尹	少納言	中納言	次官
五位	大宰府	亮	亮	同	同	將	將	將	少輔	少納言	中納言	判官
六位	大宰府	進	進	同	同	將	將	將	少輔	少納言	中納言	判官
	大宰府	屬	屬	同	同	將	將	將	少輔	少納言	中納言	主典

官職表 (大寶令を基本としたもの)

圖の時及び方位



日六十二月一十年九和昭
濟定檢省部文
 用科語國校學業實・用科文漢語國校學中



本讀本日新 五訂

大正十四年十月十三日發
 昭和三年七月廿三日訂正三版發行
 昭和六年七月卅一日訂正五版發行
 昭和九年七月 日訂正七版印刷
 昭和九年十月廿八日訂正八版印刷

大正十五年一月五日訂正再版發行	定	價
昭和三年十一月五日訂正四版發行	卷一八	各金六拾錢
昭和六年十一月二十日訂正六版發行	卷九一十	各金五拾五錢

編者 吉澤義則

印刷者兼發行者 鈴木政雄

發行者 鈴木常松

發兌
 東京市神田區神保町一丁目二五ノ一
 大阪市東區博勞町五丁目五十六番地

修
 編輯部座東京二六四番
 文館
 編輯部座大阪四七一番

Handwritten notes in blue ink, including the characters '吉澤' (Yoshiyoshi) and '義則' (Yoshinori), and other illegible characters.

少系德

吉
吉
吉
吉
吉
吉
吉
吉
吉

三

存 停 才

女
水

什
伙

什
存
木

積

行
錄
嘆

已
抄
衫

文
作
動

Handwritten characters in the top right corner, possibly a signature or date.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

Handwritten characters, likely a name or title, written vertically.

大正十四年十月十三日發
昭和三年七月廿三日訂正三版發行
大正十五年一月五日訂正再版發行
昭和三年十一月五日訂正四版發行

定價
金六
合
錢

山宗傳中四校

西子子

山宗傳中四校

西子子

西子子

西子子